



【小説】 奪還



星野廉



目次

第1話 アクシデント	
＊	3
第2話 了解	
＊	11
第3話 親権	
＊	21
第4話 熱	
＊	29
第5話 事実	
＊	39
第6話 考える	
＊	49
第7話 部屋	
＊	59
第8話 眠る	
＊	69
第9話 逃げる	
＊	79
第10話 決行	
＊	89

第1話 アクシデント

＊

女子バレーボール部の生徒たちの姿が角に見えた。さっきより集団が一回り小さくなっている。しゃがみこんだままの姿勢で、小田真人は首を伸ばし、長瀬友美の姿を探した。友美はいちばん後ろにいる。友美と擦れ違う瞬間を頭の中で描く。

三度も会えるなんて、きょうはすごく運がいい——。また友美に声を掛けようと思い、真人は腰を上げた。一度目の時に覚えた立ちくらみはもうしない。飲み込むようにして食べたチョコレートが効いてきたのを感じる。血液中の血糖値が高まり、全身を駆けめぐらる。

「バスが事故を起こしたという連絡が入りました。乗用車に軽く追突したみたいです」

携帯電話を畳んでジーンズの前ポケットに突っ込みながら、EXの坂本という女性が言った。EXのメンバーからの情報らしい。真人を含む九人の生徒が歓声を上げる。チョコレートを口にした直後のせいか、元気な声を出していると真人は思う。みんなが甘いものに飢えている。

坂本は、また携帯電話のダイヤルを操作している。真人は、この地区にいるEXのメンバーの顔を思い出そうとする。コミュニケーションみたいな変な団体が存在するのも不思議だが、EXのような組織があるのも不思議だ。EXの人たちって、ボランティアでこんなことやっているのだろうか。そうだったとしたら、なぜ？

「キツネの野郎、死んじまえばいいんだ」

真人と同じく中学二年の太田が言い、「そうだ、そうだ」と何人かがそれに同調する。キツネのような目をした、中学部用送迎バスの運転者が事故の処理できりぎり舞いしているさまを、真人は想像する。事故で怪我でもすればいい。死んでも同情はしない。

キツネの尻へのピンタはものすごく痛い。ピンタというより空手チョップだ。必ず腫れてあざになる。人目につかない所を的確に攻めてくる。勉強になると考えればいい。よく見ておいて、あいつの技を盗んでやる。いつか同じ目に遭わせてやる。

「じゃあ、お祝いを兼ねて、きょうは奮発しましょう」

電話を終えた坂本は言い、一口チョコを再び一人に三個ずつ配り始めた。坂本がそばに来ると、かすかに甘い香料の匂いが漂う。胸がドキドキする。学校やコミュニケーションで香水のたぐいや化粧品の匂いがすることはない。

「じきに代わりのバスが来るみたいだけど、時間がかかりそうだから、ゆっくり食べてもいいみたいよ」

真人たちは、体育館の脇でコミュニケーションからの送迎用バスを待っている。十月に入ると、午後三時過ぎには日が陰る場所だ。部活の生徒たちが、学校の敷地を囲うようにして設

けられたランニングコースを走っている。日の当たらない体育館脇に差し掛かると、決まって走る速度を落とす。

おれたちには部活は関係ない。真人は思う。万が一、やっていいとコミュニケーションが許可したとしても、その後で作業をさせられるのならごめんだ。働かせているんだから、もっとご飯を食べさせろよ。特に朝食抜きは、いくらなんでもひどすぎる。とりとめもなく、頭の中で愚痴をつぶやいているうちに、ランニングコースを走っている長瀬友美が三メートルほど近くまで来ていた。

しゃがんでいた真人は一気に立ち上がった。立ちくらみはしない。坂本が「お祝い」で追加してくれた甘い元気の素が血と筋肉に補給されたような気がする。

「友ちゃん、だいぶバテてるな。これやるよ」と、一個だけ残しておいた一口チョコを差し出す。

「そっちこそ、どうしたの。いつまでここにいるの？」

「好きでここにいてるわけじゃないよ。バスが事故ちゃったんだって。いい気味だ——。それより、口開けて」

「わたし、小田君のエネルギー源を消費する気はないわ」と、足踏みをしながら友美が言う。

「いいから開けて」

無理やり友美の口を押し開けようとして、真人の左手が友美の小さな顔に近づく。友美は慌てて真人の右手に握られたチョコを奪い、すばやく包みを外して自分の口に放り込んだ。真人が友美の手からプラスチックの包装紙を奪い取る。指と指が触れる。

遅れて走って来るバレー部員の女子たちが、後ろに迫ってくる。パタパタとスニーカーが地面を打つ音を間近に感じたのか、「じゃあ」と友美は両手を小さく振って走り出した。友美の口で溶ける甘いチョコの香りが残っているような気がして、真人は息を吸い込んだ。

バスを待つコミュニケーションの生徒たちが、坂本に紙を手渡す。坂本が持ってきた手紙、坂本に預ける手紙やメモ。

「プラスチックも回収」

坂本を始めとするEXのメンバーたちの抜かりのなさに、真人はいつも感心する。一口チョコの入っていた包み紙も集める。うっかりポケットに入れたままコミュニケーションに戻り、コーチに見つかると大変なことになる。

真人は、千葉県に住む祖母からの手紙を返した。手紙には十秒ほど目を通しただけだ。内容は、いつもと変わらなかった。

「元気」、「心配」、「いつか会える」、「雄詞を見ていて——」、「欲しいものがあったら——」、「ご飯、足りて——」、「EXを通して——」、「希望を捨てずに——」。

そんな言葉はもう読みたくもない。真人はあきらめと怒りの混じった気持ちになる。今では、あきらめのほうが強い。

一年半ほど前に一家でコミュニケーションに来たばかりのころには、頻繁に返事を書いたが、今では書く気もしない。書いても何の意味もない。祖母や、短期間暮らしたことのある祖母の住む団地のことを思い出したくない。思い出すとつらい。

弟の雄詞は、小学部用の送迎バスで、この時刻にはコミュニケーションに戻っているはずだ。雄

詞は、お祖母ちゃんに今でも手紙を書いているのだろうか——。今朝、ほうれん草畑で作業をしていた弟の姿が頭に浮かんだ。痩せたなあ。目がうつろだった。真人は思い出す。おれもあんな感じになっているのだろうか。体重が減ったことは確かだ。頭もぼんやりする。

「甘いものが欲しい」、「ご飯をお腹いっぱい食べたい」、「肉をもっと増やしてもらいたい」——。コミュニケーションでの作業中には、そんな言葉が周りから聞こえてくる。食べ物の話ばかりだ。それでいて、肝心の食事中には喋るのは厳禁だから、みんな黙々と食べる。

このままじゃ、人間ではなくなってしまう。コミュニケーションに長くいる人たちや子どもは、半分は人間、半分はロボットみたいだ。コミュニケーションを取り仕切っているやつらだけが、ぎらぎらしている。あれも人間じゃない。かといって、ロボットでもない。人食い鬼——。コミュニケーションに来る前にやっていたゲームに出てきた怪物を、真人は思い出した。

「じゃあ、またチャンスがあった時に」

坂本がバスを待つ生徒たちに手を振り、近くに停めてあった軽自動車に乗り込もうとする。

「坂本さん」

中学三年の木村将太の声がした。真人を含む八人の視線が一斉に声のした方に集まる。「ぼくを連れて行ってくれよ。我慢できない。あそこでの生活は、もう嫌だ」

将太は、母親とコミュニケーションに来て、一カ月も経っていない新入りだ。コミュニケーションでは、子どもの新入りには特に警戒する。年が上になるほど、警戒の目は厳しい。逃げる恐れがあるからだ。

親たちは納得済みだ。自分たちの意思でコミュニケーションに入会し、財産や持ち物をすべてコミュニケーションに預けている。子どもたちは、親について来ただけだ。将太が来てほぼ半月間は、病気だという名目上の理由で、学校には通わせてもらえなかった。毎日、農作業ばかりをやらされていた。真人は、その姿に、かつての自分を重ねて見ていた。

「ああやって、徐々に飼い慣らしていくわけだ」

ある日、真人が、にわとり用の飼料の袋を運ぶ作業をしながらトマト畑に目を向けていると、そばで江崎慎一郎の声がした。畑には、やる気のなさそうな顔をして草取りをしている新入りの将太がいた。江崎は、中学卒業後もコミュニケーションにいる青年部の部員だ。コミュニケーションでは、少数の生徒を除いて、高校進学が認められていない。

「江崎さんは、二十歳を過ぎてもここにいるつもりなんですか？」と、以前真人は尋ねたことがある。

「外に出る？ 無理だろうな。二十歳になれば十六年間も、コミュニケーションにいたことになる。おれって物心がついた時には、ここで暮らしていたんだぜ。十六年も外で生活した経験がない男だぜ。想像できるか？ 世間になじめるわけがない。浦島太郎みたいなもんだ。いや、ずっと刑務所にいた男か。おれは、ここで骨を埋めるよ。たぶんな——」と、江崎はいつものポーカークフェースで答えた。

真人の目から見ると、コミュニケーションの子どもたちは、年齢が高くなるほど、無口でロボットか家畜のような存在感を漂わせている。小さいころに親と一緒に来て、コミュニケーションの生活期間が長い者たちは、外の世界のことをほとんど知らないようだ。外に関心を示す

者も、真人の知る限りではない。内心は分からない。そもそも話をしたことがない。

中学二年の真人のほうの一つ下の学年だということもあり、新入りの木村将太とはまだ話したことがない。将太を初めて見かけたのは、夏休みが終わって少ししたころだった。あれから一カ月くらいしかたっていない。将太の容姿の変化に、今改めて驚く。げっそり痩せ、目が落ち込んでいる。時折、下唇から顎にかけての皮膚がひきつる。

真人は、一年半ほど前にコミューンに来たころの自分を思い出した。来たというより、両親が真人と弟の雄詞を連れて、コミューンに移り住むようになっただけだ。コミューンでは、大人と子どもは別々に生活する。子どもはいくつかの年齢層に分けられ、共同生活をさせられる。

話が違う。だまされた。最初のうちは、そんな思いがあった。今では、そうした気持ちも薄れてきている。コミューンに来たてのころと比べて、現在は体重が十キロは減っている。めまいや立ちくらみをよく覚える。風邪を引きやすい。常に体がだるい。授業中は、たいてい机に突っ伏すようにして眠っている。勉強には身が入らない。物事を考えるのが面倒でならない。

どうしようもない。どうでもいい。真人は思う。すべては食事と農作業を中心とする労働が原因だ、ということは分かっている。両親には会えない。コミューン内はもちろん、学校にも、文句や苦情を言う相手はいない。校内で口を利くのは長瀬友美くらいだが、真人はコミューンの話をするのは避けている。

EXの人たちが言うように、この町全体がコミューンによって支配されている。ここは、日本なのだろうか？　自分は、とてつもない長い夢を見ているのではないか？　この夢は、一生続くのだろうか？　そんな疑問がわいてくることもある――。

「おれもお願いします」真人は自分の声に驚いた。「おれも、コミューンを出ます。とりあえず、千葉のお祖母ちゃんの所に連れて行ってください」

バスを待つほかの生徒たちが動揺した。何か言いたそうな顔をしている者。下を向いて考えにふけているように見える者。二人で何やら話し合っている者。残りは、いつもと同じくバスが来る方向を見つめているが、どこかぎこちなく落ち着きがない。

真人は気分が高揚するのを感じた。チョコレートのために高まった血糖値が、こんなに持続するものなのか。さっき友美の言った「エネルギー源」が今ごろになって突然血液中に混じり、こんなに胸が踊るような気持ちを引き起こしてくれるものなのか。

そんなことはない。これは、勇気なんだ。真人は自分に言い聞かせる。おれは、自分の中にあるものを忘れかけていたんだ。貧弱な食事、コーチたちの監視の目と腕力、そしてコミューン全体に満ちている不気味な静寂。あきらめと恐怖の入り交じったあの静けさの中で、おれは大切なものを忘れかけていた。それは、勇気だ――。

坂本の行動は機敏だった。すぐさま携帯電話で二カ所と連絡を取った後、落ち着いた声で言った。

「これから、わたしたちは木村君と小田君を脱出させます。成功するか失敗するかは、正直言って分かりません――」ここで坂本は息をついた。「いずれにせよ、今回のわたしたちの行動によって警戒が厳しくなるから、みんなとはしばらく会えなくなるでしょう。

でも、またチャンスがあったら、いや、チャンスを作って、みんなに会いに来ます」

「馬鹿やろう。勝手な真似しやがって」

生徒の一人が叫んだ。真人にはその罵倒の意味が分かった。脱走者が出ると、たとえ坂本の属するEXが関与していたとしても、中学部全体の連帯責任にされる。食事の量が減る。労働時間が長くなる。道場で、コーチたちとの剣道の試合をぶっ倒れるまでさせられる。監視と指導が強化され、コミュニオン全体が暗く重い雰囲気包まれる。

残された者たちには、もう一つの悔しさもあることを真人は知っている。EXが脱走を支援できるのは、保護してくれる親族がいる未成年者でなければならない。保護だけでは駄目だ。脱走する未成年者の両親と親権を裁判で争って勝てるだけの見込みがあること。さらに親権をめぐる争おうという信念のある親族がいる子どもに限られる。こうした知識は、EXのメンバーたちから聞いたさまざまな話の断片を、真人が組み合わせたものだ。

ここにいる各中学生の家庭の事情を、坂本やEXのメンバーたちは熟知しているはずだとも真人は思う。

おれたちの申し出を聞いたとき、坂本さんは即座に決断を下したにちがいない。木村将太とおれの場合には、脱走を支援してもオーケーだと判断したわけだ。ひょっとすると、EXはこうした状況が発生するのを、日ごろから想定して動いているのかもしれない。

残る生徒たちは自分たちが捨て置かれたという失望と怒りを感じているはずだとも思う。

「木村君、小田君」と呼び、坂本は真人と将太を並ばせて、その間に割り込んだ。「一緒に、みんなに謝りましょう」

傍らに立つ坂本の手のひらが、真人の後頭部に触れた。坂本が漂わせている化粧品の匂いが、まだランニングコースを走っているはずの長瀬友美を連想させる。反射的に真人は頭を下げた。顔を横に向けると、坂本も頭を垂れている。将太も深々と頭を下げている。

きびきびとした動作で、坂本は軽自動車の後部座席に将太を押し込んだ。次に真人の肩に手を掛けて、耳元でささやいた。

「小田君、木村君がちょっと緊張しているから、気を付けてあげてくれる？」

真人は以前、EXに頼らず単独で脱走した経験がある。だが、結局はEXの世話になった。坂本を含むメンバーの何人かとも面識がある。EXは女性のメンバーのほうが多い。今、坂本から声を掛けられ、自分が頼りにされているような気がして、真人はうれしかった。

「了解」

短く小声で答えた。EXのメンバーが頻繁に使う言葉だ。自分でも信じられないほどの元気が出て来た。脱出は成功する。いや、絶対に成功させてやる――。

運転席についた坂本は、ドアを全部ロックし、再び携帯電話を使い、「完了。出発します」とだけ話し、バスが来るのとは反対方向に車を発進させた。

左側にいる将太がいきなり後ろの窓を振り返った。真人は何げない振りをして、その様子を見守った。将太はすぐに前方に向き直り、大きなため息を一つついた。相変わらず、口元をピクピクさせている。ためらった後、真人は将太の右手に手を載せた。手の

下の固い握りこぶしから少しずつ力が抜けてくるのが感じられる。

真人は長瀬友美の手を握った時のことを思い浮かべていた。友美と、どうやって連絡を取ろう？　少しだけでいい。きょう中に電話で事情を話しておきたい。三人の乗った車が交差点で信号待ちをしていると、いったん家に帰った後らしい小学生たちが黄色いヘルメットを被り、自転車を押しながら横断していく。

弟の雄詞のことが気に掛かった。あいつら、雄詞につらく当たるんじゃないか——。コーチたちに対し、一瞬殺意に似た感情を覚えた。いつか、迎えに行く。必ず、奪い返してやる。

思わず力が入った右手がズボンのポケットに触れた。何かがかさついた感触があった。ポケットに手を突っ込むと、一口チョコの包み紙が一枚出て来た。ランニングコースにいた長瀬友美の手から奪い取ろうとして、指と指が触れ合った瞬間がよみがえる。

今度の脱出は絶対にうまく行く——。真人は、眠気に似た幸福感に包まれた。右足を伸ばすと、硬い座席の上部がうなじに当たる。腰を浮かし気味にし、真人は包み紙をそっとポケットに押し戻した。

第2話 了解

＊

懐かしい匂いがする——。ドアを開けた瞬間、小田真人は思った。祖母の住まいの匂いではない。コミュニンの外で人が生活している場所の匂いだ。ロボットか家畜のような人間たちが飼育されているコミューンの中では、絶対に嗅ぐことのできない匂いだ。

「わたしたちは、これで失礼します」

EXのメンバーの男女二人は、靴脱ぎに立ったまま、中には入らなかった。

「連絡は密にしましょう。固定電話をお使いになる場合には、子機は避けてください。電波が飛びますから、盗聴される恐れがあります。親機もコードレスですか」と、池田という女性が尋ねる。

「いいえ」と祖母が答えた。

「これからは、頻繁に携帯電話を使うことになります」池田が話を続ける。「バッテリーの予備を最低一個ご用意ください。それから、充電はこまめに——。わたしたち二人は帰り、ここでの監視は仲間にバトンタッチします」

「今夜は、この番号に電話してください」山岡という男性のメンバーが言い、祖母に紙切れを渡す。「ここに残る仲間の名前も、そのメモ用紙に書いてあります。尾崎と清水です。朝まで外で見張っています」

「お世話をおかけしました。何とってお礼を申し上げていいか——」と言って、祖母が頭を下げる。

「面倒が起こるのは、これからです。覚悟してください。真人君、お祖母さんを助けてあげてね」と、池田が真剣な顔つきで真人に言う。

「了解」

真人は、EXの人たちの返事を真似て答える。

「お祖母ちゃんと二人で力を合わせて、頑張るんだぞう——」山岡が真人に言い、「小田さんも大変かと思いますが、微力ながら、わたしたちも支援しますので」と祖母に向かって言い添えた。

二人はドアチェーンとドアのロックを外し、公団住宅特有の狭い玄関から、そっとドアを開けて外廊下へと出た。

「お腹空いてる？」

二人が帰った後、祖母が言った。

「お祖母ちゃん、本当にいろいろ迷惑かけることになるけど、よろしくお願いします」

真人は深々と頭を下げた。

「任しておいて。あの団体のやり口については、EXや対策研究会の人たちから聞いているから大丈夫。自治会の信頼できる人たちにも、簡単に事情を話しておいたから」

「で、お腹は？」

「大丈夫。それより電話貸して」

「どこに掛けるの？ 慎重に行動しなきゃ」

「学校の友達で、どうしても一言、事情を話しておきたい人がいるんだ」

「あの町に電話するときには、くれぐれも気を付けてね」

「はい」

迷ったが、真人は固定電話を使うことにした。祖母の携帯電話の番号は、できるだけ他人に知られないほうがいい。

「あの電話、使わせて」と断り、固定電話の親機に向かう。最初に一八六を押し、暗記している番号を押し。

祖母は、「あっ、そうそう」と言いながら、シニア向け携帯電話機を取り出した。さっき山岡から渡されたメモに書いている電話番号を登録していく。手慣れた操作に真人は感心した。

「はい」

三回の呼び出し音の後に、聞き覚えのある男の声がした。

「もしもし、小田真人と申しますが――」

「小田君、無事かい？」

「ぼくは大丈夫です。そっち、大変なことになっているでしょ」

「君が想像している通りだと思うよ――。待ってくれ。すぐ代わるから。おや、もう横に来て」

「もしもし」

「友ちゃん？ 元気にしてる？」

「元気にしてる、じゃないわよ」と長瀬友美は切り出した。「今、どこ？」

「ちょっと待った。これ、コードレスじゃない親機のほうで話してる？」

「もちろん。お父さんは、その点に関しては手抜かりがないから」

長瀬友美の顔とその父親の強面が目の前にちらついた。どうして、あんな顔の父親から、あんなにかわいい娘が出来るんだろう。真人はいつも思う。

「さすが」

以前に単独でコミューンから脱走したさいに、真人はその父親に世話になった。EXの人ではない。協力者とEXでは呼ばれている。コミューンが力を持っている町にも、コミューンの活動や思想に批判的な人もいる。友美と仲良くなったのは、その父親と知り合ったのがきっかけだった。

「ねえ、それより――」

「それから、あとで電話機の通話記録から、この番号を削除しておいてくれる？ 念のため」

真人はポケットに手を突っ込んだ。プラスチックの小さな長方形の包み紙を取り出し、親指と人差し指で挟む。包みの中にあった一口チョコをほお張った時の友美の表情が、

脳裏によみがえる。あの瞬間から五時間ほどしかたっていない。それなのに、何日か前のことにも感じられる。

友美が向こうの様子を喋りまくっている。コミュニケーションも学校も、もうどうでもいい。真人はそう思う。この数時間に、いろいろなことがありすぎた。

コミュニケーションの送迎用バスの事故。帰ろうとするEXの坂本に、脱出の意思を突然口にした木村将太。ほとんど無意識のうちに同調していた自分。バスを待つ場所に残されることになった者たちの恨めしそうな顔。

坂本の手際のいい行動。中古車センターでの着替え。横浜ナンバーのバンの後部座席に腰掛けての、三時間余りのドライブ。東京で下りて、そこに待機していたEXのメンバーと並んで手を振った将太の緊張した表情。車の中で知らない間に眠ってしまい、起きた時には、もうこの団地の敷地内にいた。

「ねえ、聞いているの？」

「聞いているよ」

「でね——」

耳に響く友美の声が心地いい。何を喋っているのか。内容なんてどうでもいい。その声を聞いているだけで幸せな気分になる。あの町で友美が生きていて、こうして自分が無事に祖母の家に着くことができ、電話線で二人がつながっている。おそらく、心もつながっている——。真人は強烈な眠気に襲われた。

ドアチャイムの音がしたのは、午後十時半過ぎだった。その数分前に、EXの尾崎と名乗る男性から、警告の電話があった。早い。それにしても早すぎる。真人は、全国的に展開しているG友の会の力に改めて驚いた。

コミュニケーションはG友の会の多岐にわたる事業の主力部門だと、真人は聞いている。この国のいたる所にコミュニケーションや支部や営業所があるらしい。ここに来て、まだ一時間くらいしかたっていない。きっと、この近くにあるG友の会の支部に連絡が行って、そこのやつらが飛んで来たんだ——。真人は想像する。眠気が一気に失せた。

真人は祖母と一緒に玄関に立った。

「どちら様ですか」と祖母が声を張り上げる。対応は祖母がすると決めてあった。

「G友の会と申します。小田満さんと小田章子さんのご子息、真人君を迎えにまいりました」

向こうも声を上げている。この団地にはインターホンはない。郵便受けは一階にまとめて並んでいるため、金属製のドアを隔てての会話になる。

「こんな遅い時間に、失礼じゃないですか。どちら様ですか？　いったい、何のご用ですか？　セールスならお帰りください。うちは布団も、保険も、化粧品も、畳も、シロアリも、宗教も全部間に合っています——」

祖母は一方的に喋っている。時間を稼いでいるように、真人には見える。

向こうはいらだったのか、チャイムが三度続けて鳴った。

その直後、ドアのすぐ外で言い合うような複数の声がした。E Xの尾崎という人から電話があるとすぐに、祖母はどこかに電話を掛けていた。G友の会の者たちと言い争っているのは、祖母が電話で助けを求めた、この団地の自治会の人たちらしかった。

警察官が到着して、ようやく祖母はドアを開けた。示し合わせた通り、真人は祖母と並んで靴を履き、玄関の上がり口に立った。

「夜分遅くに来ていただいて、どうもありがとうございます」

お辞儀をしながら、祖母はドアの外に出て、正面にいる制服姿の警察官二人に言った。祖母と一緒に外廊下に出た真人も、つられて頭を下げた。G友の会から来た男たち三人が間を置いて、警察官の後ろにいる。その三人の背後で見守っている、自治会の人たちらしい男性二人と女性一人に、祖母は軽く会釈した。

「ああ、煙草臭い。ドアは閉めさせてもらいますよ」という言葉とともに、祖母は開いたドアを支えていた手を離した。ドアが音を立てて閉まる。

煙草の臭いを漂わせているのは、G友の会の男たちのようだ。警察官二人がそばにいるせいか、自治会の人たちを相手に怒鳴っていた勢いはなく、おとなくしている。

広くもない外廊下に、十人が集まっている形になった。

警察官が、祖母とG友の会の男たちの言い分を交互に聞いた。双方の間で、「親権」、「拉致」、「誘拐」、「旅行」、「子ども的人権」、「児童虐待」、「ネグレクト」、「G友の会」、「洗脳」、「強制労働」、「自由」、「優良団体」、「県会議員」といった言葉が飛び交う。相手は建て前と理屈で攻めてくる。同じ言葉が違った意味を帯びてすれ違う。お祖母ちゃんもなかなか勉強している——。真人は頼もしく思う。

「ちょっとそのまま、待っていてください」

両者の話に耳を傾けていた、真人の父親と同じくらいの年に見える警察官が、二十歳前後に見える警察官を残し、廊下の端へと歩いて行く。非常口から外に出た階段の付近から、無線を使って話している声がする。

真人は怖くはなかった。ただ、興奮した。団地の向かいの棟の窓やベランダから、住民たちがこっちを見ているのが見えた。何しろ、パトカーが来ているのだ。それに十人近い人だから——。

無線での連絡を終えた年上のほうの警察官が戻って来た。

「この件に関しては、警察は介入しません。事件性が認められるとすれば、住宅侵入罪ですかね」と、その警察官は言い、G友の会の三人をにらんで、「あなた方、これからどうなさいますか？」と尋ねた。

「しかしですね、これは未成年者に対する——」

三人のうちの一人が話し始めたのを、終始無言でいた友の会の男がさえぎった。「では、われわれは外で待たせてもらいます」

「もちろん、車でいらしているんですよね。そこでお名前や詳しい事情をうかがいましょう」と、警察官が男たちに声を掛けた。

「不法侵入だけでなく、敷地内にいる不審車両や不審人物の通報もこまめにしないといかん」と、自治会の役員ばい年配の男性が、誰の顔を見るともなく大きな声で言った。

警察官たちは、真人の祖母と自治会の人たちらしい三人に敬礼をし、ちらりとするどい視線を一瞬真人に向け、前を進む三人の男たちの後に付いて行った。

＊

布団に入っても、真人はなかなか寝付けなかった。

長瀬友美の顔と声を思い出そうとしているうちに、友美の父親と出会った時の記憶がよみがえってきた。

ちょうど一年ほど前だった。全財産をG友の会に預けた両親と共に、真人が弟の雄詞とコミュニンに入って、半年もたないころ、真人はコミュニンから一時的に脱走した。「君たち、ちょっといいかな——」

ある日、コミュニンから少し離れた畑に五人で歩いて移動している途中に、見知らぬ男が声を掛けてきた。監督者の役割を果たしていた青年部の江崎という十七、八の男が、「無視しろ」と言ったため、真人たちは男には取り合わなかった。男が去ると、「あいつはジャーナリストだ。絶対にかかわるなよ。話をしたことがばれると、コーチたちから半殺しにされるぞ」と、江崎が脅した。

その翌日の午前——。体育の時間に、コミュニンに住んでいる生徒たちだけが、いつものように固まってグラウンドの隅で腰を下ろしていた。どこから校内に入ったのか、前日声を掛けてきた男が、真人を含む三人のそばにしゃがみ込んだ。男はいろいろな質問をしてきた。コミュニンの生徒たちは、誰も男の相手をせず、ほかの生徒たちが幅跳びをやっている方向に目をむけていた。

「外部の人とは話しちゃ駄目だって、命令されているんだよね。分かる、分かる。コーチっていう世話役たちが怖いんだよね。そうか、そうか」と、男は慰めるような猫撫で声で言った。「じゃあ、こっちが質問をするから、イエスだったら軽くうなずいて、ノーだったら横に首を振ってよ。それならいいだろう。別に話したわけじゃないんだから——」

そのとき、何げなく男に目をやった真人は、胸ポケットに小型のテープレコーダーが差し込まれているのに気づいた。なぜか、男にコミュニンの中のことをぶちまけたい衝動に駆られた。

「朝ご飯は今でも抜きなの？」

「世話役に殴られたことある？」

「この一週間以内にお父さんかお母さんに会った？」

「農場では農薬を使っているって本当？」

「お風呂は毎日入らせてもらえる？」

「作業は一日、全部合わせると五時間くらい？」

「じゃあ、六時間くらい？」

「七時間くらい？」

気がつくど、真人はうなずいたり首を振っていた。三十ほどの質問に答えたところで、校舎のほうから教員が駆けて来るのが見えた。質問していた男は礼も言わず、そそくさと逃げた。

「小田、おまえ、返事してたよな」

コーチにちくすることで知られている生徒が、薄笑いを浮かべて真人に言った。その二日前に袋入りの肥料を運ぶさいの要領が悪いと言われて、真人は世話役の一人から、尻の腰に近い部分に強烈な鉄拳を食らわされた記憶が全身を襲った。片足を引きずるほど、まだ尻は痛む。悪寒に似た震えが走った。

その日の昼休みに、真人は早めに昼食を終えた。体育館の裏手から道路を越え、狭い路地に入り、そのまま駅に向かって走った。目に付きにくい道を選んで私鉄の駅に近づいた。走りながら、金のないことに気づいた。何とかして列車に乗れないものだろうか。ドリンクの自動販売機で釣り銭を漁ったが、収穫はなかった。駅に着いたが、駅に長くいるのは危険だという気がした。駅の時計を見ると、昼休みの時間はとうに過ぎている。

このまま学校に戻ったとしても、世話役から暴力を振るわれる。ここにいても、そのうちコミュニケーションのやつらが探しに来る。いったん、駅のトイレに入り、悪臭のする個室の中で身を隠していたが、狭い所にいると余計不安になった。

仕方ない。学校に戻ろう。それしかない。真人は脱走を断念した。とぼとぼと来た道に戻ろうしていると、目の前に車が止まった。大柄な怖い顔をした男が出て来た。一瞬、コミュニケーションの大人に見えたが、乗っていた車がコミュニケーションのものらしくない。ワゴン車で、中にはビール瓶を詰めたプラスチック製の箱が積まれている。酒屋のものらしい。

「君、村の子？」

この町の住民たちが、コミュニケーションを村と呼んでいることは知っていた。真人はうなずいた。ちくるのなら、ちくってくれ——。走ったり焦ったりした後で、真人はどうにでもなれという無気力な気分には陥っていた。

「良かったら、乗らないか？　こんな所にいると、村の人たちにつかまるぞ」

低いけど優しい響きの声だった。助手席に乗ってシートベルトを装着したとたん、大きなエプロンを頭から被された。驚いたが、姿を隠してくれたのだと瞬間的に分かった。匂いと色から、その人がさっきまで身に着けていたものだと気づく。

「名前は何て言うんだ？」

聞かれるままに、真人は答えた。

「おれは長瀬。よろしくな。ひょっとして中一？」

「はい」

「長瀬友美って、知らないか？」

「さあ——」

「じゃあ、別のクラスだな」

連れて行かれたのは、EXのメンバーの家だった。

そのころの真人は、EXという組織については何も知らなかった。コミュニケーションから迎えに来るバスを待つ短い間に、子どもたちの親族や親戚からの手紙を渡す。子どもたちの中に手紙を書いた者がいれば、それを受け取る。甘いものに飢えている子どもたちに、一口チョコを与える。そういう人たちがいることは知っていた。だが、それが組織化された人たちの行動だとは、考えもしなかった。

EXのメンバーの男性は、武田と名乗った。さっきの酒屋の主人は、コミュニケーションにいる子どもたちを支援している自分たちに、資金援助をしてくれている人たちの一人だと

教えてくれた。EXというグループがあることも教えてくれた。

「お腹、空いてない？」と武田が尋ねたので、真人は大きくなずいた。コンビニの弁当を食べさせてくれたあと、武田は真人の話聞き、いくつかの質問をした。

「事情はよく分かった——。小田君、正直に言う。残念だけど、ぼくたちは、今の君にしてあげられることはない。ごめん」

武田の家から、真人は学校へ戻った。その後に起こったことは、思い出したくなかった。

「ぼくたちには、君たちのためにできないことのほうが多い。でも、少しずつできるよう努力する。それだけは忘れないでいてほしい」

別れる時に武田が言ったその言葉が、今も耳に残っている。

「了解」

そうつぶやいて、真人は祖母の家で眠りについた。

第3話 親権

＊

祖母がうとうとしている。煮物の入った鍋が吹きこぼれそうになっている。真人は急いでガスレンジに向かい、火力を弱めた。

「あらあら、ごめんなさい」

祖母が立ち上がろうとする。真人は手を振って制し、「おいしそう。もう出来上がっているみたいだから、ぼくが盛り付けとかやるよ」と声を掛ける。

「じゃあ、お願いしようかしら」

「了解」

真人がこの団地に来てからの三日間、祖母は洗った食器をふくこと以外にキッチンでの手伝いをさせてくれなかった。昨日はキャベツを切るなどの簡単なことをやらせてくれた。今朝は勝手に居間の掃除をしたが、何も言われなかった。

疲れているんだ——。真人は思う。電話での連絡によると、EXの人たちが、団地の自治会の許可を得て、交代で団地内やその近辺を見回っていてくれるらしい。真人が来た日の夜以来、G友の会には目立った動きがないとも言う。

「二カ月前に、民放のニュース番組の中で、コミュニケーションについての特集が三回連続して放送されたの。それが影響しているんだと思う」。東京のEXの女性からの電話の中で、真人はそんな話を聞いた。「あの人たちがこのままで済ませるわけがないから、十分に警戒してね」

買い物は自治会の役員で下の階に住む人が、電話で用を聞いて代行してくれている。真人は祖母と居間にいてテレビを見たり、新聞に目を通したり、EXの人からもらった雑誌を読んだりしている。

活字を読むのがつらい。コミュニケーションで一年半いた間に、国語力や文字を追う集中力が低下しているのを感じる。テレビはおもしろいが、コミュニケーションではほとんど見ることができないせいで、知らない芸能人やミュージシャンがたくさん出てきて、話題やギャグについていけなくなっている。

難しい漢字の多い新聞を読みたくないため、テレビのニュースを見るが、内外の出来事がびんと来ない。外国に住んでいて、いきなりこの国に戻ってきたような戸惑いがある。

「おれ、料理を覚えたい。お祖母ちゃん、きょうの夕飯、作ってもいい？ 野菜炒めなら、できそうな気がする」

「だめだめ」と祖母は言いながらも、その口調は強くない。

「だって、退屈なんだもん」

退屈という言葉が、祖母には効く。ずるいとは分かっているが、真人はあえてその言葉を使って取り引きをしようと思いついた。祖母自身も退屈なのは分かっている。その原因は、自分だ。

「お祖母ちゃん、出掛けてきなよ。歩いたりして、適度に運動しないと体に良くないよ。戸締りをしていれば、おれ一人でも大丈夫なんだから」

何度もそんなことを言い続けているうちに、祖母は言った。「じゃあ、お昼を食べてから、下の山口さんの所にお邪魔しようかしら」

「そうしなよ。一緒に買い物でもしてくればいいじゃん。夕飯のおかずは野菜炒めだよ。もちろん、作るのは、おれ」

＊

久しぶりで一人になった。ずっと祖母と一緒にいたために、テレビを消した居間で寝転がっていると、いろいろな音がするのに気づく。上や下の階で人の動く音。窓の外から聞こえてくる人声や車の音。隣のベランダで何かをしている人の気配。

一人だ——。でも、おれは仕方なく、ここに閉じ込められているだけだ。先が見えない。真人はいらだちに似た不安を感じた。どうなるのかが分からない。いつまで、ここでこうやっているのだろう。

テレビを付けたが、昼間の番組はおもしろくない。それでも、しばらくドラマを見ていた。ちょっとしたトラブルはあるが、幸せな家族を描いたドラマだった。そのうちに、馬鹿じゃないか、こいつら、と思えてきたので、テレビは消した。

退屈だった。

祖母がマンガを読むわけがないと思いながらも、居間の棚に目をやると、簡単な装丁の薄い雑誌が何冊か並んでいる。祖母が熱心に読んでいるのを何回か目にしたことがある。真人は何げなく、一冊抜いて手に取った。「奪還の会——奪われた子どもたちを取り戻すために」という文字が表紙に記されている。

市販のものではなく、素人がプリンターやコピー機で複製して、簡単にステープラーでつづり合わせた冊子らしい。中身に目を通してみると、宗教団体やカルト集団やG友の会を始めとする妙な組織内で暮らしている子どもたちについての実話や情報が書かれている。

真人は、自分と同じように祖父母や親戚の家で暮らしている子どもたちの話を拾い読みした。見たこともない言葉がたくさん出てくる。そういうところは飛ばす。

親権という言葉が、頻繁に出てくる。これなら知っていると思う。小説のように、物語っぽく書かれた実話は読みやすい。読み進めると、結局は組織に連れ戻されたという例が多いのに気づく。祖父母や親戚の者に親権が認められた例はごく一部だ。これから先が不安だった。そのうち、目が疲れてきた。読むのを止め、仰向けになって天井に目をやる。

親権——。真人は、その言葉の意味を考えた。分かるようで分からない言葉だった。少なくとも、子どもには関係のない言葉だと思う。子どもをさしおいて、大人たちが勝手に議論する時だけに使われる、テキトーでふざけた言葉だ。

電話の鳴る音が耳に飛び込み、真人はあっと声を上げていた。受話器を取る。E Xの玉井という女性からだった。東京からこの千葉の団地まで車で連れて来てくれた女性の

一人だ。

「——こちらとしては、判断は君に任せるつもりです。わたしたちが口を出す問題じゃないから」

真人と木村将太に、直接会ってインタビューをしたい。二カ月前にコミュニケーションに関する報道をした民放のテレビ局からEXに連絡があり、意向を打診してきたらしい。

「玉井さんは、どう思いますか？」

「個人的な意見という意味なら、受けたほうがいいという考えなんだけど、EXの中では、あの番組の担当者をよく思っていない人が何人かいるの。一口にマスコミと言っても、考え方や報道のスタンスに違いがあってね」

「木村君は？」

「まだ決めかねているみたい」

「急ぐ話じゃないんでしょ？　考えてさせて」

「テレビ局の者だと名乗る電話があるかもしれないから、その点はくれぐれも注意して。名前と連絡先を聞いて、いったん電話を切って、すぐにわたしたちに電話をしてくれる？」

それだけは約束してほしいの。万が一ってことがあるから。でも、判断するのは、あくまでも君よ——」

夕食後に洗い物をしていると、予想していた電話があった。真人は玉井から言われた通りの対応をし、ただちにEXに電話をした。十分もたたないうちに、折り返し玉井から電話があり、ある携帯電話の番号を告げられた。さきほど電話をしてきた人物のプライベートな携帯電話の番号だという。

「確かに、その人はテレビ局の人。君から連絡をもらってすぐに、わたしがその番号のケータイに電話をしたら、その人、びっくりしていたわ。『どうして、この番号を知っているんだ。それに、おれが小田真人に電話したのを知っているのは、なぜなんだ？』だって」

玉井の声に笑いがこもる。

「こっちは人の命にかかわる活動をしているんだもの。調べるべきことは、ちゃんと調べてある。で、その人への返事は、今知らせた番号のほうにしておいてくれる？　その番号の方が安全だから。返事を急ぐ必要はないと思う。じっくり考えることのほうが大切。もし迷っているなら、相談に乗るわ——」

祖母にその話をすると、真人の顔をじっと見て言った。

「ご飯の時にも言ったけど、わたしもあの番組はあまり好きじゃない。見た感想では、興味本位って感じがしたね。コミュニケーションの子どもたちのことを、本気で考えている熱意が全然感じられない。こういう不気味な団体がありますよー。怖いですねー。それだけじゃない、あの番組の取り組み方——。それに、コメンテーターっていうの？　識者っていうの？　番組のゲストで喋っていた人たちも、事の本質がまるで分かっていなかったし」

「そう思った？」

「わたしは、そう感じたね。でも、利用してこっちに有利なことがあるのなら、利用すればいい」と言って、祖母は考え込んだ。きょうは久しぶりに下の階に住む山口という人

と買い物に出たせいか、元気を取り戻したように見える。「とは言っても、難しいところだわね——」

そのとき、固定電話が鳴った。真人は反射的に居間の時計を見た。午後七時を回ったところだ。ディスプレイに玉井の携帯電話の番号が表示されている。

「動きがあったの。大切な話だからよく聞いて——」

真人のいたコミュニケーション内部にいる協力者から連絡があり、きょう真人の父母の姿が見えないという。東京のEXの支部では、二人が既に団地の近くにいるのではないかという見方が優勢らしい。親権者自らが出て来た場合には、警察の対応も前回とは違ったものになるだろう。G友の会から派遣されてくる人員も前よりは多いにちがいない。きっと弁護士もついてくる。玉井は言った。

「大丈夫だよ」と、真人は尋ねる。

「とにかく、警察官が来るまでは、ドアを開けちゃ駄目。いい警察官に当たるのを祈りしかないわ。警察官にしろ、裁判所にしろ、児童相談所にしろ、役人の対応はまちまち。事なかれ主義がほとんど」

「頑張るよ」

「頑張る？ わたし、その言葉は嫌い。頑張っても、解決できないことが多すぎる。希望を持つことは大切。心の支えになるから。でも、現実をしっかりと見つめることのほうが、ずっと大切だと思うの。ごめんね。わたしは何でも思ったことをずばりと言うほうだから」

「おれ、玉井さんみたいな人、好きです。そ、尊敬しているって意味で——」

「あら、どうもありがとう。ファンが一人増えたって、彼氏に言っておくわ」

「……………」

「この時刻なら、それほど遅いわけじゃないから、緊急事態だと思って覚悟していてほしいの。こちらからも、車がそっちへ向かっているところ」

テレビ局の問題で頭を悩ませていた矢先に、それよりもはるかに大きな問題が持ち上がりそうな気配になってきた。真人は、祖母に玉井からの電話の内容を手短かに伝えた。祖母は、すぐに自治会の役員宅に電話をし始めた。

これまでの経験では、こうした事態になった場合、未成年者が親権者の保護下に置かれるという形になる可能性がきわめて高い。そう言った玉井の言葉が、頭を離れない。「それって、連れ戻されるという意味ですか？」と真人が尋ねると、「そう理解しておいて」と玉井は短く答えた。

もし本当に父母が近くに来ているとすれば、ぐずぐずしてはいられない。賭けるとすれば、今しかない。真人は心を決めた。

「お祖母ちゃん、しばらくケータイ借りるよ。そして、細かいお金で一万円ほど貸して」

突然の申し出に祖母は、驚いた表情を見せた。

「真人、あんたまさか——」

「おれ、ここを出る。ここにいても、結果は見えているじゃないか」と真人は言って、居間の棚に並んでいる冊子を指さした。「親権だろ？ お父さんとお母さんが来たら、親

権があるって言って、おれを連れて帰るんだ。警察も、自治会も、EXも、どうしようもない。ただ、見ているしかない。そうだなんだろう？」

真人は、座ったまま居間のテーブルに置いてあったシニア用携帯電話を手に取った。真人が立ち上がり、祖母もつられるように腰を上げた。

「もしお父さんたちが、その辺に來ているとしたら、時間がないんだ」

「駄目よ。危険な真似はよして」

祖母の声は震えている。

「何が危険なんだよ。おれがここにいるのが一番、危ないんじゃないか？ お祖母ちゃん、それくらい分かっているだろう」

「とにかく、警察の人が來てから——」

「そんなの当てにならないことも、分かっているじゃないか」

「真人、落ち着いて」

再び、真人は柵を指さした。「親権には絶対に勝てないってことくらい、知ってるよ。お祖母ちゃんだって、分かっているはずだ。ちゃんと現実を見なきゃ駄目だよ」

「でも、裁判で——」

「今そんな悠長なことを言っている場合じゃないことは、はっきりしているじゃないか。時間がないんだ。お願いだよ。お願いだから、おれの思うようにさせて——。ねっ、おれを信じてくれよ」

真人は頭を下げた。

＊

団地の建物と月の位置を頼りに、西へと狭い道を選んで駆ける。途中で携帯電話が鳴った。迷ったが、電源を切る。逃げるのを優先するべきだと思う。

一歩団地の敷地から出ると、田舎だった。家の灯りが散在し、周囲は暗い。街灯から街灯へと達するたびに、「よし」、「よし」と声を出して自分を励ます。車と擦れ違うさいには身がこわばる。自分が賭けの真っ只中にいるのを感じる。生き延びるか、車に乗せられ売られていく家畜になるか。

外にいる——。真人はつぶやく。ここはEXの人が用意してくれた車の中ではない。お祖母ちゃんの家の中でもない。もちろん、コミュンの中でもない、学校の中でもない。ほんの数時間のことだったが、一年前に脱走したことがあった。長瀬友美のお父さんと出会った、あの日。あれ以来だ。

外にたった一人である。解放感と孤独感が同時に込み上げてくる。真人は泣き出した衝動に駆られた。しっかりしろ——。声に出して、自分に言い聞かせる。頬を叩き、込み上げてきた不安と恐怖心を抑える。

見知らぬ土地だが、団地が見えなくなるまで走り続けるつもりだった。団地が光のかたまりとなり、手のひらくらいの大きさになったところで、真人は前のめりに倒れた。胃液が込み上げてくる。倒れた拍子に下唇を切った。歯でかんだのか、コンクリートの地面でこすれたのかさえ分からない。

何とか立ち上がる。街路灯を避け、道の脇の暗い草地に入る。辺りを見回し、腰を下ろ

す。月明かりの下で、祖母が渡してくれた布製の袋を開ける。シニア用携帯電話機、充電器、お金の入った封筒、神社のお守り。お守りを見た瞬間、声を上げそうになった。慌ててジーンズの前ポケットに手を突っ込む。

「あった」

長瀬友美の手から奪い取った一口チョコの包装紙——。これが、おれにとってのお守りだ。真人は思う。走り疲れて感覚のなくなった顔に、笑みが浮かんでいるのが感じられる。舌の先で唇を探ると血の味がした。おれは、まだ生きている。真人は立ち上がった。

気分が落ち着いてきた。海の匂いがする。EXの人たちと車で団地に向かう途中、道路地図を見せてもらったのを思い出す。北が上の地図の中で、団地のある町の左側に海があった。このまま進めば海に出合える。海——。

柔らかい草の上に座り込んだせいか、突然疲れと眠気が襲ってくる。わざと下唇をかむ。

「痛い」

生きている。血の味が海へと誘っているような気がした。

第4話 熱

＊

考える。だるくなる。眠る。夢を見る。汗をかく。目が覚める。考える。だるい。また眠る。夢。うなされる。目覚める。考える。だるくなって、また寝入る。そんなことを繰り返していたことは覚えている。

いろいろな情景。会話。話し声。風景。幼かったころの記憶。コミュニケーションや学校での出来事。長瀬友美が走る姿。最後に見た弟の雄詞のやせた体。生まれたばかりの雄詞と、病院の新生児室で対面した時の複雑な気持ち。EXのメンバーの車の窓から見た海。祖母の顔。コミュニケーションに入る前の家族の思い出。赤ん坊だった雄詞のはいはいする姿——。そうした記憶の断片が前後の関係なく交錯する。

数々の断片が頭に浮かんだのは、目を覚まして考えていた時なのか。それとも、眠っていて夢の中で見たことなのか。それが分からない。

テレビか映画でも見ているような感じが続いている。生きて動いているはずの、自分の体が感じられない。熱い空間。火照る自分という、重いかたまり。この熱いかたまりが、おれなのか。

けだるい。眠い——。

＊

小田真人は、三日目に目を覚ました。

部屋の中を見回し、自分に体がある、自分は体を持った生き物なのだ、という実感がわいてきた。頭の中を整理しようとする。ここは、玉井さんの車で来た所で、玉井さんの彼氏が住んでいて、その人が食事を運んでくれて、その人に支えられておしっこをした——。いや、その前に、池田さんが、海に向かっていたおれを車で拾ってくれて——。

「よお、だいぶ元気そうな顔になったなあ」

真人の耳に、太い声が飛び込んで来た。反射的に真人は上体を起こそうとした。

「無理はするな。でも、やってみな。そうそう、横向きになって、右手をついて、ゆっくりと——」

「よし。自分で起きられたな。まだ立つなよ。そのままでもいい。それとも、おしっこがしたいか？」

その言葉を聞いて、この男の人に支えられて便器に座った記憶がよみがえった。

部屋の隅に目が行く。ベージュのポータブルトイレが置いてある。あれだ。あれを使っておしっこをしたんだ。抱き枕みたいな大きなクッションに寄りかかった姿勢で、アイスクリームを食べたり、ゼリー飲料をすすったり、マグカップに入った水を飲んだ覚え

もある。この部屋の中での出来事が徐々に頭に浮かんできた。その前には——。思い出すことができそうで、できない。それよりも——。

「おしっこがしたい」

「一人で起きてみるか？」

「うん。いえ、はい」

「頭もはっきりしてきたみたいだな。よかった」

「あのう」

「どうした？ やっぱり無理か？」

「いいえ。お名前を聞いていいですか？」

「そうか、まだ正式に自己紹介し合っていなかったな——。えっと、君の名前は知っているけど、意識がはっきりしているかどうか試すために質問するぞ。君の名前は？」

「すみません。こっちが先に名乗るべきでした。小田真人です」

「ぼくは沢田重行。よろしくな」

「こちらこそ、よろしく。というか、いろいろお世話になっています」

「そうそう、おしっこだ。そこで漏らしちゃ、駄目だぞ」と言って、そのあごひげを生やした男性は大笑いした。

＊

マンガを読むのは、久しぶりだった。四コマ漫画だが、とぼけた落ちがあっておかしい。何度も吹き出す。そのうちに笑いが止まらなくなってくる。真人はコミュニケーションに入る前の気分を思い出していた。あのころは何の心配もなかった。それに自由だった。マンガをよく読んだ。

「おもしろいか？」

「はい。それにしても、すごいなあ、漫画家だなんて」

「だから、さっき言ったじゃない。ぼくは、売れない漫画家兼『家のダニ』だって。その証拠に、その漫画本を本屋で見かけたことないだろう。それに、漫画を描いているだけでは食えないから、親父の店を手伝っているんだ」

真人が寝ていたのは、沢田の実家の一室だった。一階が、沢田の父親が経営する画材店。二階は住居。三階には、沢田が仕事場として使っている部屋と、沢田の自室、そして「物置」があるという話だった。自分が寝ていたのは、その「物置」らしい。

「漫画家になるって大変なんですね」

「総理大臣とか国会議員になるよりかも大変かもよ」

「はあ？」

「いや、これは冗談。でも、食べていける漫画家になるのは、予備軍のうちでほんの一握りくらいしかいない。才能だけじゃなくて、運やコネも必要だし、時代の空気というか流行に左右されるし——」

「そうなんですか？」

真人は、沢田の仕事部屋を見回した。どうしても、壁にピンで留められた一枚の写真

に目が行く。玉井と沢田のツーショットだった。玉井さんて、笑うとこんなかわいい顔になるんだ——。真人は、クールな表情を崩さない玉井のいつもの顔を頭に浮かべた。

玉井と初めて会ったのは、木村将太と一緒にコミュニケーションから脱出した日に、横浜ナンバーのバンで東京に着いた時だった。バンが、サンシャインシティが間近に見える駐車場に止まった。そこにEXのメンバー三人が待っていた。コミュニケーションのある町から一人でずっと運転してくれた男性と将太とは、そこで別れた。

メンバーの三人が車に乗り込み、簡単な自己紹介があり、バンは再び出発した。池田という女性が運転し、助手席に着いた山岡と名乗った男性が時々携帯電話でどこかと連絡を取り、玉井が後部座席で真人と並んだ。

真人は玉井を一目見て、かっこいい女の人だと思った。姿勢がよく、ちょっと澄ました感じがする。長瀬友美と同様のさらさらした髪ショートカット。目と鼻辺りの作りも、友美と似ている。

玉井が真人にこれからの生活についての諸注意を伝え、真人の家族関係について質問をした。話しているうちに、真人は玉井に対し、本気で話を聞いてくれて本音で意見を言う人だという印象を抱いた。

真人はツーショットの写真に再び目をやった。無意識のうちに、くすりと笑っていた。「玉井君が来るのは遅くなるから、『物置』に戻って布団に横になっていたほうがいい。熱は下がったけど、まだ病人なんだから」と、沢田が言った。「えっと、ご飯は、普通に近いものをおふくろに用意してもらおう。それから、水分をどんどん取ってもらおうぞ。もう一人でトイレに行けるよな」

沢田さんは玉井君なんて呼んでるけど、二人っきりの時には、お互いに何て呼び合っているんだろう——。真人は、そんなことを考えながら、沢田の仕事部屋を出た。廊下を歩くと、足がまだふらつく。沢田の話によると、真人は一昨日に体温が三十八度ある状態で、ここの家に担ぎ込まれたのだという。EXの協力者の医師が診察し、疲労で衰弱しているだけだから、とにかく眠らせておくようにと指示したらしい。

＊

午後十一時半過ぎ——。「物置」にいる真人は、敷布団の上であぐらをかき、CDラジカセでFM放送を聞いていた。ずっと眠っていたせいか、時間の感覚が戻らない。

「物置」のドアがノックされた。真人が「はい」と返事をする、沢田がドアを半開きにして声を掛けた。「眠れないんだろう。玉井君が来ているから、おれの部屋に来ないか」「はい、行きます」

真人は大きな声で言い、すばやく立ち上がった。「ずいぶん元気そうじゃない——。よかった」

玉井は、相変わらずクールな表情で真人を迎えた。玉井の声がかすれている。真人には、玉井がいくぶん疲れているような感じがした。

「あの先生、いつになったら原稿を渡してくれるのかしら。いつものことだけど、やっぱり、はらはらさせられるわ」

「書く側にも相当の苦労があるからなあ。かなりのプレッシャーがかかっているはずだ。理解してやりなよ」

「シーは、どっちの味方の？」

「もちろん、クーの味方さ。ただ、原稿にしろ、漫画にしろ、作るってことは大変だっていう意味」

真人は沢田と玉井の会話を興味津々で聞いていた。二人のやりとりを耳にするのは、初めてだった。話の切れ端をつなぎ合わせると、玉井は、一時間ほど前まで、会社で仕事をしていたらしい。本業は出版社での勤務のようだ。

シーは、沢田重行の「しげゆき」の「シー」か。じゃあ、クーは、玉井く何とかの「クー」ってことだ。く——。くみこ、くみ、くにこ——。くらら？ まさか。く——。

「小田君」

出し抜けに玉井から声を掛けられ、真人は驚いた。

「くっ……」

考えていたことが口から出て、真人は赤面した。

「えっ？」

「くっ……、ええっと、くろう……。ごくろうさまでした、遅くまで」

沢田が下を向いて笑っている。ばれたか——と真人は思う。

「ありがとう」

玉井はいつもの澄ました顔で言った。きっと玉井さんも気づいている——。真人は想像する。

沈黙があった。

「とにかく、元気になってよかったな、小田君」と、沢田が助け舟を出してくれた。

「本当のことを言うと、君が逃げたのは正解だったと思う」と、玉井は真人に言った。「君のお祖母さんのケータイを持って出たのも正しい判断だった。それで、わたしたちと連絡がついたのだから」

続けて、玉井は現在真人が置かれている状況を説明し始めた。

「まさに危機一髪だったのよ。君がお祖母ちゃんの家から出て、十分も経たないうちに、お父さんとお母さんが弁護士と一緒に訪ねて来たんだから」

「すごいことになったんじゃない？」

「すごいなんてものじゃないのよ」と、くつろいだ笑顔に近い表情になって玉井は言う。

いつものクールな顔つきと違うのは、沢田がそばにいるからかもしれないと真人は思う。それにしても、すごいなんてものじゃないって、いったい何が起こったのだろう。きっと修羅場になったにちがいない。それなのに——。真人は、玉井と沢田のリラックスした雰囲気を意外に思った。

「真人君、あなた、いいお祖母ちゃんを持って幸せよ。落ち着いて的確な対応をしてくださったの。EXについても、一切触れずに気を遣っていただいて、こちらとしてはとても感謝しているの」

「そうだろう。君も、お祖母ちゃんには大いに感謝しないといけないな」

「あっ、そうだ。すっかり忘れてた。おれ、お祖母ちゃんに電話しなきゃ」

真人は自分のうかつさにあきれた。熱を出して寝ていたために、頭がどうかしている

のかかもしれないと思う。

「お祖母様は、今、行方不明」と玉井が真顔で言って、すぐに吹き出した。

「どういう意味なんですか？ お祖母ちゃんに、何かあったんですか？」

「お祖母様は、近所のお友達と温泉旅行中。G友の会との接触を避けているの。とは言っても、一時的なものよ。数日したら団地に帰るとおっしゃっていたわ」と、玉井がいつもの表情に戻って言う。

「君は病み上がりだし、おれの口から言うべき話じゃないから黙っていたけどね」

「心配しないで。お祖母様には、君の経過についてはちゃんと連絡してあるから。一人で立って歩けるようになったといっても、まだ無理をしちゃ駄目。お祖母様も、君と話をするのは、明日のほうがいいっておっしゃっていたし」

真人は訳が分からなくなり、軽い頭痛を覚えた。

それを察したのか、沢田が部屋の隅に置かれていた大きめのクッションを移動させて、「これに頭を乗せて、横になっているほうがいい」と言った。

ふかふかとしたクッションは、真人が上半身を預けられるほどの大きさがあった。頭痛と顔の火照りが、ずっと引いていく。

「何が起こったのかを手短かに話すから、目をつむって黙って聞いていて」と、玉井がささやくような声で言った。

「はい」

真人はクッションに上体を預けたまま、全身の力を抜いて目を閉じた。

「こう言っちゃ失礼かもしれないけど、真人君のお祖母様って、豪傑というか、とっても熱い人。わたし、憧れちゃった」

沢田の前だからなのか、これまでとは違った声に聞こえる。話し方も柔らかく響く。真人は一週間ほど前までいた町にいる長瀬友美の顔と、玉井の声とを重ね合わせて、耳を傾けていた。体が熱くなってくるのを感じた。

玉井の話では、弁護士を伴って訪ねて来た息子夫婦を、祖母は弁護士と一緒にあっさり家へ上がらせたのだという。まず、祖母は居間のテーブルの上にICレコーダーを置き、相手が見守る前でスイッチを入れた。

「弁護士さんを連れてきたのは、あなたたちです。突然のことですから、今、ここにはわたしたちの弁護士はいません。わたしたちというのは『奪還の会』のことです。こちらの弁護士さんがよくご存知のはずです。そういう事情がありますので、後日、わたしたちの弁護士にここでの話を聞いていただくために、この録音機に向かって話してください。それが嫌なら、お帰りください」

そのとき、弁護士が話そうとした。

「お黙りなさい」と、祖母が弁護士をにらみつけた。「ちなみに、わたしはこちらの弁護士さんとは、お話しする意思は全然ありません。あなたが一言でも喋ったら、一一〇番通報します。あなたは不法侵入者ということになりますから。いいですね、本気ですよ。廊下じゃなくて、ここに座っていらられるだけでも感謝しなさい。さあ、ご用件を聞きましようか」

そんな具合に祖母は切り出したらしい。

「真人を連れ戻しに来ました」

「真人は帰りましたよ」

「おかあさん、冗談は言わないでください。この家にいるはずですよ」

「そうですか。では、各部屋をご案内します。弁護士さん、あなたはここにいなさい。それから、その辺にあるものに触らないで。触ったような気配があったらすぐに一一〇番に掛けます」と言って、父母に各部屋と各押入れ、トイレ、風呂場、ベランダまで見せた。

「いつ帰ったのですか」

「さあ、わたしはこの年ですからね、このところ物忘れが激しくて覚えていません。きょうだったしら、きのうだったかしら」

「ここへはEXが連れて来たんでしょ。これは誘拐、拉致ですよ、おかあさん」

「気安く、おかあさんって呼ばないでくれる。わたしはあんたたちとは、縁を切ったんですから。孫は別よ。真人と雄詞は、別。あなたたちは、孫の虐待者。わたしの敵です。さて、EXさんの人には、お手紙やお小遣いを預けて渡してもらっていることはご存知ですよ。日本国憲法で保障されている通信の自由と通信の秘密を守ることについては、コミュニケーションとEXさんとの間で、いちおう合意ができています。そう聞いています。だから、お手紙なんかを預けています」

「とぼけないでくださいよ。EXの坂本という人が、真人と木村という生徒を拉致したという証言があります」

「そうですか。それは初耳です。わたしは知りませんので、裁判のさいに話してください。そちらが裁判を起せばの話ですけど。叩けば埃の出る身。さぞかし、いろいろな事実を明るみに出さなければならないでしょうね。膿も出るでしょう。あの団体に、墓穴を掘る度胸があるんでしょうか」

「コミュニケーションの悪口は止めてください」

「あら、今の話って、別にコミュニケーションのことを話していた訳じゃないんですけどね。コミュニケーションって、埃や膿と関係があるんですか。へーえ、怖い怖い」

「それはいいとして、じゃあ、どうやって真人はここまで来たんですか。説明してもらいましょう」

「遊びにいらっしゃって手紙に書いて、旅費をEXさんに預けたんですよ。電車とタクシーを使って来たんじゃないかしら。十分なお金を預けてあったから」

「そうですか。そうやってでたらめを言ってとぼける気なんですね。でも、変だなあ。列車に乗ったとすれば、時間的に合わないんですけどね」

「さあ？　知りませんね。わたしにそんなこと聞いても分かるわけがないでしょ。ずいぶん朝早く出たんじゃないの」

「学校が終わってから、送迎用のバスを待っていて、拉致されたんです」

「証拠でもあるんですか」

「二人が拉致される様子は、コミュニケーションの中学部の生徒たちが見ていました。その子たち全員が証人です」

「証人？　じゃあ、裁判所で話してください。わたしは法律の素人ですから、そういう難しい話は分かりません。さあ、そろそろ、わたしは寝る時間です。お引き取り願います。風邪を引いたのかしら、ぞくぞくしてきました」

「おかあさん、こんなんじゃ済むと思ってるんですか」

「今度は脅しですか。録音機に向かって、脅しの文句をおっしゃい。どんどんおっしゃいなさい。お気の済むように」

「小田さん、あなたは自分のなされたことの意味がお分かりに——」と、弁護士が初めて口を開いた。

「お黙りなさい」

そう言うなり、祖母は立ち上がって電話機に向かい、おもむろに一一〇番通報をした。「一言でも喋ったらって、さっき言ったはずですけどね——。言葉の意味がお分かりにならない法律の専門家っているんですね」

警察に通報し終えた祖母は、続けてほかにも電話を掛けた。

自治会の人たちがすぐに駆けつけ、五分以内にパトカーが到着した。真人の父母と弁護士は、警察官から事情聴取を受け、引き上げたという。

いつの間にか真人は目を開け、上体を起こし、クッションの横で体育座りをしていた。身を横たえたまま聞ける話ではなかった。動悸がし、体が汗ばみ、顔が火照る。

「お祖母さんが録音してくださったやりとりを聞かせてもらったから、今わたしがした話は、かなり忠実な再現のはず。それにしても、見事なほど落ち着いた対応だったわ。素敵な人。わたし、本当に感動しちゃった」

喋りっぱなしだった玉井は、そう言った後、テーブルの上に置かれていたミネラルウォーターをラッパ飲みした。

「すごいお祖母ちゃんだね」

沢田も、コーヒーの入ったマグカップに初めて口をつけた。

I Cレコーダーが祖母の家にあるのは、真人も知っていた。脱出した日に、父母の代理だと言ってG友の会の者たちが来た時には、祖母はエプロンのポケットにレコーダーを忍ばせて対応していた。G友の会の人間と話すさいには、常に会話を録音しておくようにEXから助言されている、と祖母から聞いた。

「それからね」と言って、玉井がそばに置いてあったバッグから紙切れを取り出した。

「昼間、お祖母様に電話した時に、あなたへの伝言を頼まれたの。これから、わたしが聞き取ったメモを読むから、そのまま聞いて——」

『真人へ。わたしは、あなたを信じています。あなたは強い子。あなたの父親とは大違いです。ほんの数日間だけど、あなたと一緒に暮らしてみて、わたしは分かりました。これから先、きっと苦勞もするし、つらい目にも遭うと思うけど、わたしはあなたを信じています』

読み終えた玉井が、声を詰まらせた。

「以上よ。明日になったら電話をするけど、照れくさいから、これだけは、きょう中にわたしから君に伝えておいてほしいと言われたの」

*

その晩、真人はまた熱っぽさを感じた。心配した沢田が体温を測った。三十六度八分くらいでほぼ平熱だ。衰弱した体で、祖母の話を聞いたために興奮したのではないかと、沢田は言い、とにかく眠るようにと薬をもらった。

「沢田さん」

「物置」から出ようとする沢田に、声を掛けた。

「何だい？ 『おしっこがしたい』なんて、言うなよ」沢田は振り返り、にこやかな表情で言った。「くみ、だよ。永久の久に美人の美で、久美——。玉井久美」

「どうして分かったんですか？ さっき、とっさに話そうとした時に、しくじったから？」

「それもあるけど、クーはおれの彼女だ。そういうことは、すぐに分かる」

「久美——、じゃあ、一字違いだ」

「何のこと？ ひょっとして——」

「その『ひょっとして』って、たぶん当たってると思います。友達の友に美人の美。友美」

二人は同時に、笑みを浮かべた。笑顔の沢田さんって、クマの縫いぐるみに似ている——。真人は思う。

「おやすみ。もし夢の中に出てきたら、その友美ちゃんによろしくな」

「了解。おやすみなさい」

寝床に着いたものの、熱っぽさは去らなかった。手のひらを額に当ててみると、むしろ冷やりとする。喉がやたらに渴いた。真人は上体を起こした。枕元にあるペットボトルに入ったスポーツドリンクをマグカップに注いで、一口飲んだ。手のひらだけがいやに熱かった。

第5話 事実

＊

上半身にぼかしが入っている。声も加工されてかん高い。主に足元だけが映し出され、暗い画面の下に白い文字の字幕が次々と入れ替わる。声が聞き取りにくいために、字幕に集中する。

「一人で列車に乗ったんだ？」

「はい」

「友達のほうは？」

「知りません」

「E Xの車で逃げたという、証言があるんだけど」

「勘違いじゃないですか。ぼくは事実を言っているだけです。E Xの人を通じて親戚の人からたくさんお金をもらったって、友達が言うから、その一部を借りただけです」

「E Xの人が手紙とかを持って来たのは、君たちが脱走する——」

「脱走じゃないです」

「失礼。君たちが脱出する——」

「脱出じゃないです。ふらりと旅行に出ただけです」

「でも、それって一種の家出と同じだよね」

「ぼくは旅行に出て、自分の家に帰ろうとしただけです。コミュニンはぼくの家じゃありません」

一緒にテレビ画面を見ていた人たちの一人が、「その調子」と合いの手を入れるように声を上げた。

「だって君は、自分の意思でお母さんと一緒にコミュニンに入ったわけでしょ」

「おふくろは、体が弱いんです。それでも、自分の信念を通したいと言うから、おふくろを助けようと思って付いて行ったんです。でも、コミュニンでおふくろに会えたのは、一カ月に一度だけです。いや、あれは会ったんじゃない、見かけただけ——。そんな所は家じゃないです」

「コミュニンは家じゃないと言うんですね」

「ぼくは事実を言っているだけです」

「コミュニンの中の生活に話題を移しましょう。コーチという世話役たちから暴力を受けたことはありますか」

「殴る、蹴る、狭い部屋に二十四時間閉じこめられる、ご飯を食べさせてもらえない、強制労働をさせられる、親に会わせてもらえない、家や親戚からの手紙は自由に読ませてもらえない——。これも暴力に入りますか？」

「いや、そこまで広い意味で言ったわけでは——」

「児童虐待って言うんですよね。家に帰ってから、親父にもらった本の中に書いてありました。おふくろと違って、親父はコミュニケーションには批判的です」

「なるほど。じゃあ、どんな虐待を受けたのかを詳しく教えてください——」

録画された番組を見終えた小田真人は、しばらく声が出なかった。EXのメンバーの住むアパートの部屋に沈黙が続く。三人のメンバーが、それぞれの思いにふけているように感じられる。

真人も考える。木村将太とは、ほとんど口を利いたことのない間柄だったが、あんなに頭のいいやつだとは思わなかった。

今見たインタビューでの将太の受け答えは、EXのメンバーが仕込んだわけではない。真人は確信する。EXは、子どもの意思と選択を尊重する。

自分たちがある意味で違法なことをする場合には、そうはっきりと言う。その法律的に問題のある行動によって、どんな結果が起こる可能性があるかも、ちゃんと説明する。それをどう解釈し、自分がどういう行動をとるかは、子ども自身に任せる。

将太と一緒に乗ったバンを運転していたメンバーも、自分の行動は、法的には拉致や誘拐と解釈される可能性が高いと語った。「それは君たちが未成年者だからだ」と、その人はずばりと言った。

将太の場合には、実父がコミュニケーションの住民ではないから、裁判所が将太の希望に有利な判断をする見込みがある。真人は、親権者である両親がコミュニケーションにいる限り、たとえ祖母の家にいるとしても、連れ戻される可能性がきわめて高い。また、真人の両親がEXを訴えれば、EXはきっと敗訴する。そして、刑事罰の対象にされる。そうした意味のことを、運転をしながら、その人は言った。

「もちろん、わたしたちも有罪判決を受けるだろう」と、その人は断言した。

真人は自分の置かれた立場を理解しようと努める。だが、考えなければならぬことが多すぎる。知らないことも多すぎる。

この十日間にあまりにもたくさんのが起こりすぎた。頭がパンクしそうだ。真人は叫びたい衝動に駆られた。その衝動を鎮め封じるかのように、長瀬友美と玉井久美の顔が交互に頭に浮かぶ。

『希望を持つことは大切。心の支えになるから。でも、現実をしっかりと見つめることのほうが、もっと大切——』

このアパートへと真人が向かう直前に、玉井の言ったことが思い出された。現実を見つめると言っても、何が現実なのかが分からない。真人は爪の伸びた右手を固く握りしめ、いら立つ気持ちを抑えた。

『ぼくは事実を言っているだけです』

テレビ局の人とのインタビューの中で、将太が繰り返していた言葉が耳に残っている。将太がそう口にするたびに、抵抗を感じた。素直にうなずけない発言もいくつかあった。

事実を言っているだけ——。

あの言葉に対して覚えた違和感は、何だったのだろう。真人は考える。将太の受け答えは、相手に逆らっているようにも、質問をはぐらかしているようにも聞こえた。

事実と現実って、どう違うんだろう。ひょっとすると、事実と現実とかいうものなんてないのかもしれない。あったとしても、言葉を使えば、どうにでも言えるものなのかもしれない。言葉は意味があるようで、実は空っぽなのではないか。それとも、知らないうちに中身がすり替わる、インチキくさい手品師の箱なのではないか。

「これが家出なら、別だよ」。そうだ。確か、バンを運転していたあの人は、そう言った。忘れかけていたけど、間違いない。「家出をしたと言ってくれ」とは言わなかった。でも、あれはそういう意味だったんだ。真人は思う。

脱走、脱出、誘拐、家出、旅行。コミュニケーション、家。殴る、蹴る、暴力、手紙を自由に読めない、児童虐待。EX？ 関係ないですよ。事実、嘘。

将太はふらりと旅に出て、家に帰っただけだとか言っていた。あれは嘘だ。お祖母ちゃんは、おれが勝手に団地に遊びに来て、帰ったと言っていた。それも嘘だ。事実じゃない。でも、そう口にするだけで、事実になるんだ。ずるい。すごくずるい。

でも、許される嘘ってあるんじゃないか。きっとそうだ。嘘をつくことで、自分や自分を助けてくれた人たちが救われるということがある。

お祖母ちゃんだって、おれが団地を出たからこそ、毅然とした態度でお父さんとお母さんを相手にして対決できたんだし、平気で嘘がつけたんだ。あの嘘を事実や真実と呼んでも、許されるんじゃないか。現におれだって――。

「小田君、大丈夫？ 顔色が悪いぞ」

この部屋の主である山岡が声を掛けてきた。さっき、テレビ画面に向かって「その調子」と喝采した人物だ。

「すみません。お茶、もう一杯もらえますか」

「ああ、悪かった。湯飲みが空になっている」

山岡が小さなキッチンへと向かった。

「とにかく助かったわ。木村君のおかげで、わたしたちが追及される可能性は、かなり低くなった。あとは、裁判になった時の証言だけ――。そのことは、その時に考えましょう」と、池田が自分に言い聞かせるように言った。サンシャインシティの近くで将太と別れたさいに、コミュニケーションの所在地の町から運転してきた人とバトンタッチして、千葉県のお団地まで運転席に着いていた女性だ。

EXのメンバーには、頭の回転が速くて楽観的な人が多いと真人は思う。楽観的というより、どんな時にも希望を捨てない強さというべきか――。

祖母の住む団地から、頭の中の地図と月の位置を頼りに「海へ海へ」と、頭の中で唱えながら西に向かった夜。あの時に携帯電話で連絡を取り合った相手も、池田だった。

「そばに何が見える？ 家か電柱があったら、その近くに番地の表示があるはずだから、探してみて――」

「コンビニがある。でも、もう締まっているよ」

「よかった。コンビニなら店の番号とかで位置が確認できる」

実際には、月が動くことを忘れていた真人は、途中から団地の方角へと逆戻りしかけていたのだった。それを後で聞かされて、自分のうかつさに真人は赤面した。

「中川君、湯飲みをもらっていくよ。新しいのをいれたから」と、山岡が言う。

「おれ、緑茶は嫌いだから」

「じゃあ、ほかに何か飲む？ えっと何があったけ——」と、山岡が冷蔵庫を開けようとした。

「何も要らないです」

「分かった」

何てぶっきらぼうなやつだ、と真人は思う。礼儀も知らない。見ているとむかつく。その中川という二十歳前後の人はEXのメンバーではない。そのようなことを玉井久美が言っていた。初めて会ったのは、団地から脱出した夜の公民館前だった。

自分の位置を確認する目印となったコンビニは、警備会社の車が見回りに来る可能性があるから、別の場所で落ち合おう。池田が提案した。

指定された公民館にたどりついた時には、辺りには誰もいなかった。月と雲の流れをぼんやりとながめていると、車が来た。車内灯がつく。運転をしていたのは池田で、年齢不詳の男が後部座席にいた。

「小田君！ 会えてよかった」

池田が車から飛び出すように降り立ち、抱きついて来たのには驚いた。化粧品か香水の甘い香りが鼻腔を刺激した。一瞬、自分が幼い子どもになったような気持ちがあった。池田と胸を合わせているうちに、その子どもじみた感情がたちまち失せた。頬が火照った。

車内灯がついたままの車の横に立ち、しきりに話し掛けてくる池田の表情は明るかった。それとは対照的に、その男は後部座席に腰掛けたままで、車外にいる二人とは別の方向に顔を向けていた。髪は長めで顔はよく見えなかったが、若い感じがした。

真人は助手席に座らされた。後ろにいるその男に一言礼を言い、挨拶しようと思ったが、まったく取りつく島がない雰囲気のを漂わせている。ひどく疲れていた真人は、気を使うのが面倒になり、結局声を掛けなかった。

運転をしている池田とは話したが、その男とは全然口を利くことなく、東京に着いた。

池田と真人が車から出た後、少し間を置いて、その男が車を降りた。車の中では割と小柄に見えたにもかかわらず、背が高いのに驚いた。身長が一八〇センチ以上はありそうだった。姿勢が悪く足が長いから、車内で座っていると背が低く見えたのだと気づいた。あまりにも、むすっとしているため、真人はそこでも挨拶する気にはなれなかった。

EXの人たちは、その中川という人の言動に慣れているのか、つけんどんとも言える態度を別に気にしているようではなかった。物事をはっきり言う玉井久美も、その人の振る舞いに対し、何も言わない。

あんなやる気のなさそうで、むかつくやつが、どうしてEXの人たちと共に行動をしているのだろう。真人には謎だった。

「じゃあ、これでお開きということで——」と山岡が言い、池田が腰を上げ、中川もけだるそうに立ち上がった。

真人は、今いる山岡のワンルールのアパートに泊まることになっていた。

二人が帰った後、山岡は「お腹空いていない？」と尋ねた。ここに来る前に四人で、山岡の行きつけの定食屋で夕食は済ませてあった。真人は空腹を感じたが遠慮が先立ち、「大丈夫です」と答えた。

「ぼくは午前三時に掛ける用がある。変な時間だろう？　こういう活動をやっていると、他人から見ると、あいつ何やってんだろみたいな生活になるのは仕方ないよ」と言って、山岡は真人に合鍵を手渡した。

「で、悪いけど、ぼくはこれから睡眠をとる。君は好きな時に眠ればいい。もちろん、テレビを見てくれていいし、お風呂も好きな時間に入って構わない」

山岡は八畳ほどの部屋の隅に積んであった、二人分の布団を、頭の部分が反対になる形で敷いて並べた。

真人は、音量を下げたテレビに視線を向けていた。テレビの位置から、どうしても視界に山岡の姿が入ってしまう。申し訳ない気持ちで一杯になる。山岡は、すばやくスウェットに着替え、壁際の布団に潜り込んだ。

「おやすみ」

布団の中から山岡が言った。体育座りをしていた真人は、体を回して山岡のほうを向き、居住まいを正して頭を下げた。

「おやすみなさい。きょうはお邪魔してすみません」

「遠慮はなしでいこう。オーケー？」

「了解」

山岡は真人の目の前でアイマスクをし、携帯電話を抱えるような仕草をして、真人に手を振った。

真人は、迷ったあげくテレビを消し、バスルームに入った。「ゲスト用」と書かれたプラスチック製のバスケットが床に置かれてある。中にはスウェット上下、タオル、バスタオル、歯ブラシが入っている。

なるべく音を立てないようにシャワーを浴びていると、なぜか急に涙が出て来た。いつまで、こんな生活が続くのだろう——。

＊

山岡が出て行く気配を感じた。部屋のデジタル時計は、午前二時五十六分を表示している。真人はトイレに立ったあと、再び布団に入った。

寝入りかけたとき、ドアが開く音を聞いたような気がした。錯覚かとは思ったが、念のために上体を起こし、耳を澄ます。やはり靴脱ぎ辺りに人の気配がする。

真人は、声を出そうか迷った。とっさのことで、何と言えればいいのか分からなかった。「誰？」と尋ねればいいのか、それとも山岡が戻って来たのか、訳が分からなくなった。混乱している頭をさしおき、気配に反応した体が震えている。

「誰なの？」

結局、そんな言葉を口にしていた。

「チッ」

舌打ちするような音が聞こえた。

「ほくだよ、久しぶり——。元気にしてる？ えっと、こんな時間に訪ねてきて、ごめん」

沢田重行の声がした。玉井も一緒なのだろうか、という考えが脳裏をかすめる。時計を見ると午前三時十五分を過ぎている。

真人は飛び起きた。部屋のライトをつけ、身に着けているスウェットを整え、寝ている部屋とバスルームやキッチンネットを隔てているガラス戸に向かった。向こう側に明かりがついていないために、曇りガラス越しには何も見えない。

こんな時刻に何の用があって、沢田さんが訪ねて来たのだろう——。

ドアを開けるなり、真人は口をふさがれた。皮製の手袋の匂いが鼻を突く。ドアの横に潜んでいた何者かが、真人の背後に回り、口を押さえ、上半身に腕を回している。後ろにいる者はかなり上背がある。真人は、そのままの体勢で体を持ち上げられた。両足が浮いた。

*

中川は平然とした表情でリンゴをかじっている。真人は胸の上の辺りに、まだ痛みを感じた。

「食えよ。皮を剥いて、ちゃんと切り分けないと食えないのか」

抑揚のない口調で中川は言う。

恐怖は去った。怒りを覚えるが、こちらには勝ち目がないと体が言っているような気がする。実際、ここで争ったところで勝てるわけではない。山岡の部屋の物をいためるだけだ。

それにしても、ふざけたやつだ——。真人は思う。暴力も許せないけど、沢田の声を真似てだますなんて、こいつ、一体どういう神経をしているんだ。

食べ終わったリンゴの芯を、中川が小型のテーブルの上に置いた。真人の前に置かれたリンゴに手を伸ばしかけたところで、真人はすばやくリンゴをつかみ、かぶりついた。せめてもの抵抗だ。ショックのせいで食欲は失せていたが、真人は意地になってリンゴをかじった。

「チッ」

舌打ちの音がした。

真人は、リンゴをかじり続けた。かじっているうちに、そのリンゴの味を舌で味わえるだけの心の余裕が出て来た。うまい。こんなにうまいリンゴを食べたのは初めてだ——。真人は思う。

「うまいだろ」

心を見透かされたような気がして、真人は一瞬むかついた。

「おれの田舎から送って来たリンゴなんだ」

不思議な言葉をささやかれたような気がした。中川らしくない話し方だった。

「おまえ、ここを出ろ」

中川が唐突に言った。

「……………」

「なぜ、出ろと言っているかは分かるはずだ。昼間、木村がインタビューされたときの録画を見ただろう。おまえが馬鹿でなければ、あいつが、ここを使って行動しているのを感じたはずだ」と言って、中川は自分のこめかみの辺りを、右手の人差し指で突いた。

「あいつはあいつの置かれた立場を理解したうえで、行動している。おまえは、自分の置かれた立場が分かっていない」

「そんなことない。おれだって、考えている」

「じゃあ、ここを出ろよ」

真人は、木村のインタビューを見た直後に考えていたことを思い出した。『これが家出なら、別だよ』と、東京へと向かうバンを運転していた人が、意味ありげに口にした言葉の真意——。今、EXのメンバーの好意に甘えて、ここにいることの意味。おれは、事実も現実も分かっていない。漠然とした希望とか、運とか、期待とかにすがっているだけだ。おれは、EXにとって邪魔物なんだ。お荷物なんだ。

真人はリンゴをかじり終えた。リンゴの芯が二つテーブルに並んでいる。ティッシュにくるんで片付けようと考えていると、さっと中川の手が伸びてきて、芯をそのまま近くのくずかごに放り込んだ。

中川の前で、スウェットからジーンズとトレーナーに着替える。自分の持ち物をすべてデイパックに入れる。デイパックからメモ帳を取り出して、一ページを破り、テーブルの上でできるだけ丁寧に字を書く。

その途中で、中川がさっと立ち上がり、部屋を出て行った。

『EXのみなさん、お世話になりました。ご恩は忘れません、いつか、連絡します。小田真人』

真人は自分の書いた文字を見つめた。それだけで十分だと思う。

玄関のドアが開いて締まる音がした。

デイパックを右肩に掛けて、部屋を突き切る。靴脱ぎに立ち、スニーカーを履く。ドアを開け、外から合鍵を使ってロックする。ドアに付いている郵便受けの中に合鍵を差し込む。合鍵が落ちる音がした。

外階段を降りると、そこに中川が立っていた。目と目が合う。中川が背を向けて歩き出した。真人は中川の靴のかかとだけを見ながら、後に続いた。

第6話 考える

＊

「これを渡しておく。絶対に無くすなよ」

そう言って、中川は携帯電話と充電器と、この部屋の鍵を渡した。小田真人が携帯電話をいじっていると、中川がそれを奪い取った。

「見ておけ」

中川は真人に見えるように携帯電話を操作して、「電話帳検索」を表示させた。

「この『だ』っていうのが、おれの番号だ。後は、自分で自由に登録して使ってい」

「中川さん、どうして『だ』なんですか」

「EXの人たちから聞いてなかったのか。おれ、大地っていうんだ」

「中川大地さんですね」

「そうだ。好きなように呼べ」

「大地さんでもいいですか」

「チッ」

中川は舌打ちをし、真人に携帯電話を返した。

「おれは、このアパートには当分来ない。ただ、どうしてもおれに連絡しなければならないことが起きたら、電話しろ」と言い、それまでそらせていた目線を急に真人の目に当てた。

「いいか。おれは、『お腹空いた?』なんていちいち聞かない。腹がへったら、どうすればいいか。それは自分で考えろ。食うことだけじゃない。何でもそうだ。自分で考えろ。他人に頼るなって意味じゃない。誰かに頼る必要があるのなら、自分で動いて助けを求めろ」

突然の言葉に、真人は何と答えればいいのか分からなかった。大地の目がまだ見つめている。

「はい」

真人はようやく声を出した。

「それから、もう一つ」と、大地は目をそらして言った。「警察官には気をつける。警察に保護されたら、アウトだぞ。これまでのおまえと、おまえを援助してくれた人たち全員の努力が無駄になる」

「はい。り、了解しました」

いつもなら、こういう場合には、EXの人たちが口にする「了解」という簡潔な返事をする。それなのに、とっさに「しました」を付けて答えていた。

これまでは冗談半分に「了解」と言って、EXのメンバーの返事を真似ていた。それが今では、自分の心の底に甘えがあったように思える。そんな引き締まった気持ちにさせる真剣さを、大地の忠告に感じた。

フローリングの上であぐらをかいていた大地が立ち上がった。正座していた真人も、腰を上げた。

「じゃあな」

そっぽを向いたまま、大地はゆっくりとした口調で言った。その声は、別人の口から出たように優しく響いた。一瞬、ほほ笑んだのではないかとすら思えた。真人はうれしかった。たぶん、この人は、おれのことを信頼してくれている——。そう感じた。

＊

ワンルームマンションというやつか——。真人は寝袋から顔だけを出して部屋を見回し、思いをめぐらす。

何もない部屋って言い方があるけど、本当にあるんだ。引っ越したばかりで、荷物がまだ届いていないのか。それとも、引越しが終わって荷物を運び出した後の部屋なのか。もしかすると、空き部屋を不法侵入しているのではないか。

玄関の斜め向かいにあるバスルームには、ボディークリームやシャンプーやコンディショナーがあった。歯ブラシも練り歯磨きもあった。だが、この部屋には寝袋しかない。ティッシュの入った箱も、くずかごもない。時計もない。パジャマもスウェットも渡されなかった。クローゼットに目が行く。あの中には何が入っているのだろう。真人は考える。

傍らに置いてある自分のデイパックの中に、携帯電話があるのを思い出し、寝袋から上体を出して、デイパックに手を突っ込む。携帯電話を取り出し液晶を見る。午前十時二十一分。

尻が痛い。中川のバイクのリアシートにまたがり、後ろから腰にしがみつくようにしてベルトをつかみ続けていたために、腕と足にこわばりがまだ残っている。

この部屋に来るまで、六時間近くバイクであちこち回っていたことになる。途中、中川は二カ所でバイクを止め、十分ほどして戻ってきた。どちらも古い家の立ち並ぶ一角だった。眠気と疲労で、中川の腰に手を回していることができなくなりそうに感じたとき、このアパートに着いた。それが三十分くらい前のことだった。

＊

少し眠ったが空腹に耐えられず、真人は寝袋から出た。デイパックから封筒を出す。団地を出るとき、祖母が渡してくれたものだ。

中身を改める。二万五千八百五十二円ある。一万円札と五千円札が一枚ずつ。残りは千円札十枚と硬貨だ。細かいお金があるのが助かる。EXの人たちと一緒にいた間は、このお金に手をつける必要はなかった。EXからは五十度数のテレホンカードを二枚もらった。

真人は考える。これがおれの「全財産」だ。食べるためには、お金がいる。これだけの
お金しかないのだから、贅沢はできない。場合によっては、只で食べさせてもらう手も
あるだろう。そうしたいのなら、どうすればいいか。

大地の性格だと、きっとしばらくは連絡をして来ない気がする。ということは、頼れ
る人はいない。祖母とEXの誰かに電話をしておくほうがいいのかもしれない。一人だ
けで生きていけるはずがない。

『自分の置かれた立場を理解しろ——』

『頭を使え——』

『自分で考えろ——』

何回か大地が言った言葉が頭に浮かぶ。

迷った末に、真人は玉井さんに連絡をすることにした。祖母には余計な心配を掛けたく
ない。これまでのEXの人たちの行動を見てきた経験から、自分が山岡さんの部屋か
ら出たことを祖母に告げていることはないだろうと思う。本音で本当のことを話せる相
手は、玉井さん以外にいない。

真人はジーンズの前ポケットに入れているメモ用紙を取り出した。その紙に書かれて
いる、玉井さんと主だったEXのメンバーの携帯電話の番号、そして祖母の家の電話番
号を次々と「電話帳」に登録していった。大地を見習って、番号に登録するさいには、玉
井は『た』、池田は『い』、山岡は『や』、祖母は『ば』という具合に、検索情報を一文字
だけにしておく。

玉井さんの携帯電話に電話を試みる。相手は出ない。玉井さんが、テレホンカードを
渡すときに言った言葉を思い出した。公衆電話を使って電話をくれるさいには、面倒で
もツーコールを続けて二回以上してほしい、そのうち気づくから、と。登録されていない
番号や非通知の表示がある場合には出ない、というようなことも言っていた記憶がある。

呼び出し音を二回聞いた後に電話を切るのを繰り返すと、三度目ようやく通じた。

「お、おれです。小田真人です」

「そんな気がしたわ」

「……………」

玉井さんに電話が通じたのはいいが、何を喋るかまでは考えていなかったことに気づ
いた。

「このケータイの番号に掛ければ、これから先、真人君に通じる？」

思いがけない質問をされた。

「えっ？ はい。たぶん」

本当に、たぶん、なんだろうかと思う。まだ自分がどんな立場に置かれていて、これ
から先どうなるのかが、さっぱり分からない。

「了解。じゃあ、登録しておくわ」

「あおう、おれ、元気です」

「分かってる。詳しい事情は聞かないけどね」

分かってるって、どういう意味なのだろうと真人は考える。大地が玉井さんに話した
のだろうか。いや、そうじゃない。きっと大地は、勝手に行動していたのだろう。

「いちおう、連絡をしておこうと思って」

「ありがとう。君から直接連絡をもらって、わたしも安心した。リンゴ覚えている？」

意外な質問に、真人は頭の中が混乱しかけた。

「リンゴ？ リンゴがどうかしたんですか？」

「あの人って、あれで結構しゃれたことするのよ。一昨日かな、EXの集まりのときに、田舎から送って来たけど、一人じゃ食べ切れないとかいって、リンゴをメンバーに配ってくれたの。おいしいうちに食べてくれなんて言ってた。で、君がいなくなった後、山岡さんの部屋にリンゴの芯（しん）が二つ捨ててあったって聞いたわけ。山岡さんも、『あいつらしいやり方だ』なんて言って、にやにやしていた」

山岡さんの部屋で、大地が持って来た二個のリンゴをそれぞれが食べ終えた後、真人は残った二つの芯をティッシュにくるんで捨てようとした。そのとき大地が芯をひったくように手に取って、くずかごにそのまま放り込んだことが思い出された。そうか、あれはメッセージだったのか。

「山岡さん、怒っていなかった？」

「全然。書き置きも、読ませてもらったわ」

字に自信のない真人は、顔が赤くなるのを感じた。

「ごめんなさい。あんなふうに勝手に部屋を出てしまって」

「済んだことは忘れましょう。それより、今どうするかと、これからどうするかよ」

玉井さんのこういう考え方が好きだ——。真人は思う。

「わたしたちは、あの人を信用している。君のことも信用している。まず、それを覚えておいてほしい。次に、君もあの人、そしてわたしたちも、非常に危険な状況の下にある。これも覚えておいてほしい。危険というのは、法律を犯しているという意味。分かる？」

「はい。おれにとって一番危険なことは、警察に保護されることだって意味ですよ。コミュニケーションやG友の会も含めてですけど」

「そう。よく分かっているじゃない。だから、外出する時には、十分に注意してほしいの。あまり動かないというのも一つの方法だと思う」

この通話をし終わった後に、近所を歩き回って「冒険」してみようと張り切っていた真人はどきりとした。

「一つ質問していいですか？」

「あの人のことでしょ？」

「どうして分かったんですか？」

「だって、今の君は、あの人の中にかくまわれているヒナのようなものじゃない」

「翼？」

「傘の下とか、軒下でもいいけど」と言う玉井さんの声に笑いが混じった。「ちょっと、格好をつけて言ってみただけ」

「翼にしては、ずいぶん荒っぽいけど」

そう言いながら、真人は山岡さんのアパートを出てからのことを思い出していた。外階段の下にいた大地の後を付いていくと、倉庫のような建物の隣にある空き地に着いた。

そこにバイクが置かれていた。

「おまえ、バイクの後ろに乗ったことあるか？」

真人が首を横に振ると、太目のベルトを腰に巻きつけ、二つ用意してあったヘルメットの一つをいきなり放って寄こした。リアシートの乗り方を教えられた真人が大地の腰に腕を回しベルトをつかんだ瞬間、大地はエンジンをかけ、びっくりするほどの破裂音を立てて、バイクを発進させた。

荒っぽい運転の仕方だったと思う。真人は、どれだけはらはらしたか分からない。わざとトラックと競争する。直線道路でものすごいスピードを上げる。

ただ、サイレンの音には敏感だった。少しでも、サイレンの音を聞くと、スピードを落とし、場合によっては、バイクを止めて、ヘルメットを外し耳をそばだて、サイレンの聞こえてくる方角を探るような様子を見せた。

大地の言動は、確かに荒っぽかった。

「翼にしては荒っぽいか？ 君もなかなか言うね——」と、今度は笑い声が返って来た。「君とあの人の間でどんなことがあって、山岡さんの部屋を出たのかは知らないけど、きっと荒っぽかったでしょうね。わたしたちも、あの人の腕力には何度も助けられたことがある。たくさんの修羅場を経験してきた人だから」

「修羅場？ おれ、あの人についてもっと知りたい。どういう人なの、EXのメンバーじゃないとか、玉井さん言っていたよね」

「いつか話すわ。話すべき時が来ればだけど」

「とにかく、あの人、すごく力が強い。それに玉井さんの彼氏の真似もうまいよ」

「沢田君の真似？ 意味深な発言ね。何があったのかしら」

「話すべき時が来たら話します」

「反撃してきたわね——。真人君、一つ忠告するけど、あの人のことを詮索しちゃ駄目。それだけは約束して」

「了解、いや、分かりました」

「さもないと、あの人に捨てられちゃうよ」

「えっ？」

「冗談じゃなくて、本当に。わたしたちも、あの人については、知らないことや分からないことがたくさんあるの。だから、メンバーとみなしてはいない——」

「謎の人？」

「そうね、そうも言えるわね」と言った後に、玉井さんは少し沈黙した。「君もだんだん分かって来るとは思うけど、はっきり言っておくわ。情緒が不安定だって意味、分かる？」

「何となく」

「トラウマって言葉は分かる？」

「聞いたことはありますけど、よく分かりません」

「あの人は、過去に心に傷を受けた経験があって、それがまだ治りきっていないの。だから、初めて接する人には、あの人は頭がおかしいんじゃないかって思われることがとても多くなって。難しい？」

「難しいけど、何となく分かりました。触らぬ神にたたりなしってことですか？」

「いいことわざを出してくれたわね。そう、そういうこと——」

「……………」

真人は、初めて見た時から、さっきこの部屋で話していた時までに大地の見せた、さまざまな面を思い返していた。確かに、あの人は変わっている。半端じゃなく変わっている——。

「どうかしたの？」

「変なこと言っているように聞こえるかもしれないけど」

「何？」

「人って、見かけとか、喋っている内容とか、態度とか、そういう外に表れるものでは、分かんない部分があるって思った」

「同感。わたしなんか、毎日、そう感じているわ。人間って、本当に分からない。見た目では判断できないし、話し合っても分からないし、初対面の人でも、よく知っていると思っている人でも——。あっごめんなさい。そろそろ仕事に戻らなきゃ」

「すみません。今、会社なんですか？」

「そうよ。会社でちゃんと働かないと、ご飯が食べられないし、EXの活動にも参加できないというわけ。とにかく、君のケータイの番号は登録しておいたから、何かあったら遠慮なく電話して。それから、ほかのメンバーにも番号を伝えておくわ——」

＊

午前十一時を過ぎたコンビニには、おいしそうな弁当や各種のランチメニューが置かれ始めていた。真人は財布を持っていないため、携帯電話と千円札二枚をジーンズのポケットに入れて外に出ている。いろいろなものが買いたくなる。

部屋を出る直前に、クローゼットの中をのぞいてみた。ティッシュや衣類やインスタント食品が入っていた。オーブントースターもあった。キチネットに備え付けられている小さな冷蔵庫と棚も開けてみた。

冷蔵庫にはミネラルウォーターとスポーツドリンクが二本ずつ入っていた。棚には食器類が置かれていた。どれもが、ほぼ新品で使われた形跡がないものだったのが不思議だった。

自分のために、わざわざ大地が用意してくれたのだろうか。使ってもいいという意味なのだろうか。あの人のことだから、それも自分で考えろという意味なのかもしれない。まずは昼食を済ます。それから、いろいろなことをじっくり考えよう。

さあ、腹ごしらえだ。

とりあえず目についたコンビニに飛び込み、すぐに食べられそうなものをさっと買って、まっすぐ部屋に戻る。うろちょろしていて、警察官に職務質問をされるような事態は避けたい。そう思って部屋を出たのだった。大地も玉井さんも警察官には注意するように言っていた。

自分でも、必要以上にナーバスになっているような気がする。緊張が挙動に表れているのか、コンビニの店員の視線を感じる。

「高いわね。こんなお弁当に五百円も出すの？ 馬鹿らしい。やっぱり、わたし、スーパーに行く。おにぎりもスーパーのほうが安い。きのうが遅かったし、今朝は寝坊しちゃったから、お弁当を作れなかったけど、ここはやめとくわ」

近くで、女性の声がした。会社員らしい三人連れのうちの一人が、残りの二人に手を振って外へ出て行く。コンビニの店員の警戒した目つきにむかっていた真人は、反射的にその女性の後を付けた。

確か、クローゼットの中にジャー炊飯器があったはずだ——。真人は思い出した。

『お米さえあれば、後はちょっとした工夫次第で、安く済ますことができるのよ』

貸している古い家からの家賃収入と年金を頼りに慎ましく生活している祖母も、そんなことを言っていた。

二万五千八百五十二円——。

自分の「全財産」の額をつぶやき、数メートル前を進む女性の前方向に見えるスーパーの大きな建物に目をやった。さっき、あの店を通り過ぎたのに、なぜ気づかなかったのだろう。

自分は、まだ頭を使っていない。真人はそう思い、ジーンズの前ポケットの中に指を突っ込んだ。折り畳んだ千円札二枚は、ちゃんと収まっている。

米って、最低いくらあれば買えるんだろう。

真人は、スーパーの店内に足を踏み入れながら考えた。

第7話 部屋

＊

「……、九十七、九十八、はあ、きゅうじゅーきゅー、ひゃあーく。やったあ」

汗で濡れたフローリングの上に、小田真人は顔をつけた。横を向いたつもりだったが、建材の味の混ざった汗が口に入ってしまった。息は荒いものの達成感を覚える。

連続して百回の腕立て伏せができるようになった。腹筋と背筋の力、そして握力がだいたいついてきた。部屋の隅には、中身を飲み終えた後に二リットルの水を詰めたペットボトルが六本置かれている。ダンベル代わりだ。二本をガムテープで巻きつけてくっつけたものが二組、二キロの「ダンベル」が二個。

ジョギングは、昼間や夜間を避けて、毎日早朝にやっている。同じ時間帯にジョギングをしたり、犬の散歩をさせている住民の顔も覚えた。じゃれついてくる犬には、連れてくる人に断って、その頭や背をなでてやる。生き物に触れていると、幸せな気分になる。軽く会釈をし合う間柄になった人もいる。「おはよう」と声を掛けてくる人には、「おはようございます」と挨拶を返す。そんな短い言葉のやりとりで孤独感が癒やされる。

朝は比較的安全だ。見回り中の警察官を見かけることもない。買い物は、スーパーの開店時刻直後くらいがいい。外出は、午前、午後、夕方、夜間の順で次第に危険になる。警察官やこの校区のPTAの関係者だけではない。ガンをつけたがる生徒や、完全にワルの仲間入りをした若者たちがうろつくのが夕方以降だ。

空手の構えの練習をしていると、ドアチャイムが鳴った。真人はいったん動きを止めて耳を澄まし、無視する。何かの勧誘に決まっている。携帯電話を手に取り、時刻を確認する。午後二時三十二分が表示されている。使い古したタオルを水に浸し、固く絞ってから床を拭く。

シャワーを浴びながら、腕、胸、足と触っていく。筋肉が付いてきたのを感じる。洗面台の前に立ち、鏡の中の自分の姿を見つめる。日に当たっていないため、色は白いが、何となく顔が締まってきたような気がする。孤独な生活をしているために表情が暗くなっただけか、とも思う。

＊

水曜日。

祖母から電話がある日だ。納豆と、モヤシとキャベツにウィンナーを入れた炒め物に、ご飯という夕食を終えて待つ。小型のラジオでニュースを聞いていると、携帯電話が鳴った。午後七時六分。

「もしもし、真人？」

「はい、お祖母ちゃん」

できるだけ明るい声を出す。

「元気そうね」

「すごく元気だよん。お祖母ちゃんは？」

「何とか生きています」

これは、以前、祖母から電話が掛かってきたときに真人が何げなく口にして、祖母がなぜか気に入ってしまった言葉だ。

「お金ありがとう。感謝してるよ」と、EXを通して送ってもらった生活費の札を言う。

「足りてる？」

「十分」

「なら、いいけど」

「そっちは変わったこと、ない？」

コミュニケーションや、G友の会から何らかの接触があったか、という意味だ。

「相変わらず、おとなしいわ。放送と週刊誌の影響かしら」

お祖母も、木村将太のインタビューをテレビで見たらしい。番組は、複数のコミュニケーションでの子どもたちへの虐待についての特集を、三回連続して放送した。コミュニケーションのある町と県の対応のまずさまで報道され、それが反響を呼んだが、反コミュニケーション、反G友の会という大きな運動にいたるまでにはいかなかったようだ。ただ、一定の効果はあったという。

G友の会のような農業や自然食品の販売を基盤とした組織ではなく、宗教関係の組織に親と共に入会し、親と切り離された形で共同生活を送っている子どもたちがいる。その分野に詳しいフリーランスのジャーナリストが、テレビの特集と同時期に週刊誌に記事を寄稿したことも手伝い、いくらかの効果を生んだという。

週刊誌に掲載されたのは、コミュニケーションとG友の会の支部が、地元の銀行を含む各種の企業だけでなく、行政にまで影響力を持っていることについて指摘した記事だったらしい。

背景には、企業としてのG友の会の資金力がある。コミュニケーションのある町の学校や、それを管轄する教育委員会の及び腰な姿勢も痛烈に批判された。さらに、学校が黙認どころかコミュニケーションに協力しているという意味の非難が物議をかもし出し、県議会で問題にされたという話を、真人はEXのメンバーから聞いていた。

そうした非難をかわすためか、EXや「奪還の会」による子どもたちへの支援に対する妨害は、目に見えて減ったらしい。G友の会としては、休戦と共存を望み、これ以上の争いを避けようという作戦に出ていると思われる。コミュニケーションの子どもたちには朝食が与えられるようになり、作業時間も短くなった。そんなことを、EXの玉井久美が言っていたのを真人は思い出す。

「おれは依然として『行方不明』ってわけか」

「わたしとしては不満なのよ、こういう曖昧な状態は——」と祖母は嘆き、「でも、こう

やって真人の声が聞けるということは、いい方向にむかっているんだと自分に言い聞かせて、我慢しているの。あとは……」

口ごもった祖母の言いたいことは分かっている。真人は慰めるように言った。「雄詞のことも、必ずいい方向にむかうって」

コミュニケーションに残っている小学三年生の弟のことは、一日として忘れたことはない。絶対に取り戻してやる——。雄詞の顔を思い出すたびに真人は思う。すぐにでも列車に乗ってあの町に行き、コミュニケーションの動静を探り、学校にいる間の弟を連れ出せばいい。話は簡単ようだが、現実はずっと複雑でいろいろな要素がからみ合っている。

『希望を持つことは大切だ。心の支えになるから。でも、現実をしっかりと見つめることのほうが、ずっと大切だ——』

玉井の言った言葉が、真人の焦りにブレーキを掛ける。現実を見つめるといっても、何が現実なのかが分からない。未だにそうした歯がゆい状況は変わらない。

＊

木曜日。

きょうは、近くのスーパーで九十八円均一のセールがある日だ。真人は思い出す。新聞を取っていないため、折り込みのチラシをチェックするわけにはいかないが、開店早々に出掛けて、店内でチラシをもらうか、壁に貼り出してある拡大されたチラシを見ればいい。そんなことを考えながら、早朝のジョギングから戻ってくると、アパートの敷地内にバイクが止めてあった。

ひょっとして——。なぜか体が震えた。鳥肌も立っている。だが、中川大地によって、このアパートに連れて来られた時に乗ったバイクとは違う。真人は震えが収まるのを待ち、大きく深呼吸してから、部屋のドアへと向かった。来る時が来た。真人は思う。

「鍵をよこせ」

いつの間にか、大地が背後にいた。真人は立ち止まった。大地が真人の前に進み出る。真人は金縛りにあったように、全身がこわばっているのを感じる。声が出ない。洗脳、マインドコントロール——。そんな言葉が頭に浮かんだ。

真人から受け取った鍵を手にしたまま、大地は無言でアパートの建物に近づいて行く。慌てて、真人は大地の後を追った。

真人が渡した鍵を使って、大地がドアを開けた。大地に続いて真人は、靴脱ぎ、バスルームとキッチンに挟まれた狭い空間、それから奥の部屋へと進む。キッチンにあるはずの物が無い。何もない。来る時が来た。真人は再び思う。

「おまえ、おれの所へ来い」

部屋に入るなり視線を合わせないで大地が言った。

真人はうなずくしかなかった。驚きのあまり、まだ声が出ない。驚かせたのは、大地の今の言葉ではなく、この部屋だ。再度、部屋の中を見回す。何もない。手品としか思えない。

自分が揃えたありとあらゆるものが姿を消し、寝袋さえなくなっているさまを見ているうちに、真人は時間が逆戻りしたような錯覚に陥った。デイパックと携帯電話だけが、窓際に置かれている。それ以外は、ここへ初めて来た日とまったく同じだ。

真人自身が揃えたものの数は多くない。だが、四十五分ほどのジョギングと外での体操の間に、フローリングがピカピカに光るほどきれいに掃除がしてある。しかも、食べ物や調味料の匂いさえ、ほとんどしないくらいにキチネットが片付いている。

『情緒が不安定だって意味、分かる？——』

『トラウマって言葉は聞いたことある？——』

携帯電話を通して、再び玉井久美が耳元でささやいているような気がした。

変だ。この人はやっぱりおかしい。半端じゃなく変だ。

大地と同様にあぐらをかいていた真人は、自分の足が小刻みに震えているのを感じた。大地に悟られないように、足を組み直してごまかそうとしたが、ごまかせる相手ではないと思い、すぐにあきらめた。

「きょうは何曜日だ？」

「木曜日です」

「八週間目だ」

「えっ？」

「おまえがここに来て、ちょうど八週間目だってこと」

「あれから、約二カ月経ったってことですか？」

「そうだ」

カレンダーを常に目にしていなかった真人には、二カ月という期間がぴんと来ない。

「おまえ、裸になれ」

ふいに言われた。あまりにも唐突な言葉だ。大地が口にするるとそれほど不自然に感じられないのが、不思議だった。

おれはこの人にマインドコントロールされかけているのではないか？ いや、もう完全にコントロールされている。そんな考えが脳裏をよぎる。マインドコントロール、洗脳、思考停止——。祖母の家にあった『奪還の会——奪われた子どもたちを取り戻すために』と、表紙に記された小冊子の中で書かれていた言葉が思い出される。

やっぱり、この人には宗教やカルトっぽい雰囲気がある——。真人は感じた。この部屋にいる間に、大地の過去を探ろうとしたことが何度かあった。宗教、カルト——。それが、この人を理解するためのキーワードなのかもしれない。

あぐらをかいて向かい合った大地の前で、真人は立ち上がった。言われた通りに、服を脱いでいく。一瞬ためらいがあったが、下着まで全部脱いだ。人前で裸になることには抵抗はない。一年半のコミュンでの生活の間に身についた神経なのかもしれない、と真人は思う。

コミュンでは裸になることが多かった。真冬をのぞけば、畑での作業の後には、大人も子どもも真っ裸になり、水道の水をホースを使って浴びて、汚れと汗を流した。それが当たり前だった。コミュンに入りたてのころには、かなりの抵抗があったが、躊

踏しているとコーチや青年部の人たちから小突かれたり怒鳴られた。

就寝時にも、下着なしで一つの布団に二人ずつ寝かされた。脱いだ衣類はどこかに持って行かれ、朝になってから返された。真っ裸で眠らされるのは、見張りが手薄になる夜間の逃亡を避けるためなのか、寒さに皮膚を慣らせ体を鍛えさせるためなのか。寒さを覚えるたびに、真人はその理由を考えていた。

仲のいい相手ではなかったが、コーチの指示で同じ年齢の少年と毎晩一緒に寝ていた。コミュニケーションに来て間もない夜中に、その少年に起された。

『いいか？』

そう耳元でささやかれ、相手が手を握ってきて誘った。真人は思い切り力を入れて相手の睾丸を握った。以来、相手はあきらめた。それでも冬は自然と肌を寄せ合った。そうでもしないと部屋が寒くて眠れなかった。夜中に尿意を催すと走ってトイレに向かった。朝には抱き合ったまま目を覚ますことがあった。

そんなことを思い出しながら、真人は大地の前で裸になり、気を付けの姿勢をとった。大地はそらせていた目線を真人の体に向けた。

ほとんど音を立てることなく、大地があぐら姿からさっと立ち上がった。無音、無言。それが、この人の特徴だ、と真人は思う。身長一八〇センチほどの大地の目が、一六五センチまでいかない真人を見下ろす。

真人は誇らしかった。クローゼットの中に、室内で簡単にできる筋肉トレーニングの方法に関する本と空手の入門書があった。体を鍛えろという大地からのメッセージだと受け取った。早朝のジョギングは、自分で考えて実行した。毎日バスルームの鏡で自分の体の変化していくのを見た。

「じゃあ、行こう。服を着な」と平坦な口調で大地は言い、目をそむけた。大地の顔が少し赤くなっているように見えた。

真人はトランクスに足を入れようとして屈んだ。

「悪かったな」

つぶやくような声が聞こえた。服を身に着けながら、真人はあることを思い出していた。

＊

「パソコンの操作ってできる？」

E Xの女性メンバーである池田と携帯電話で話している時に真人は尋ねられたことがあった。この部屋に来て二週間ほどしたところだ。

「たぶん——。小学生のとき、インターネットとかやる授業があったから」と真人は答えた。

池田はちょっと口が軽いところがある。そこに狙いを定めて、真人は中川大地についてそれとなく聞いてみた。最初は口が固かったが、何度か質問しているうちに、言葉の

端々から分かってきたことがあった。

大地が幼いころに、母親があるカルト集団に入会していた。大地は母親の布教活動にくっついて行く形で、毎日家々を訪ね回っていたというのだ。それ以上池田は語らなかったが、ある日、真人は粘ってみた。

「へーえっ」とか「ほーおっ」とか大げさに反応しておだてて、「何だろうなあ？ ヒントをちょこっとだけ——」などと口にし、謎々ごっこめいた会話に持ち込むと、池田はヒントを漏らした。

「インターネットカフェで、検索すれば少し分かるかも。でも、身分証明書の提示を求める店もあるから、図書館とか図書館の分室のほうが便利。無料で使える端末があるはずよ」

そう言って教えられたキーワードが、『やまがたべっそうじけん』だった。

『『やまがた』って山形県の山形と同じ漢字？』

「……。ごめん。わたし、話しちゃいけないことを話している。お願い。今、わたしが言った言葉は忘れてちょうだい。約束して。絶対によ」

＊

不案内な土地で、あるかどうかかも知れない場所を探すという外出には不安があった。それでも、早朝のジョギングコースを変えるなどしてアパートの周辺をあちこち回った。そのうち、少し遠い所だったが、区立図書館の分室を探し出した。

分室には二台のパソコンが自由に使えるようになっていた。考えていたより検索にてこずった。キーワードをいろいろ変えてみたり組み合わせているうちに、ようやく『山方別荘事件』が見つかった。

聖書研究会——、世紀末——、カルト集団——、終末論——、マインドコントロール——、集団服毒自殺——、死者十八名——、生き残った子どもたち——。

真人は、検索エンジンの最初のページに表示された十件の説明文を流し読みしただけで、各サイトに入るのは止めた。

自分は、見てはならないものを見ようとしている。真人は思う。知ってはならないことを知ろうとしている。自分にとって、今いちばん大切な人のうちの一人が負っている傷に触れようとしている。おそらく、その傷は癒えていない。それは、まだぱっくりと開いている傷口にちがいない。そんな気がした。

＊

「悪かったな」

ぼそっとつぶやくような大地の声を聞いた瞬間、真人は自分の両耳が真っ赤になるのを感じた。

大地の過去を詮索するなど玉井さんに忠告されたにもかかわらず、おれは人のいい池田さんをだますようにして、大地の秘密を知ろうとした。間接的であったにせよ、その傷のありかを探り当て、おそらくまだ血が乾ききっていない傷口に触れようとした。真人は罪悪感を覚えた。

真人が服を着終えると、大地がドアの方へと歩き始めた。急いでデイバックを肩に掛け、携帯電話をジーンズの前ポケットに入れた真人は、靴脱ぎに立った大地の後姿を見た。大地に悟られないようにその背中に向かって、そっと頭を下げる。

ごめんなさい――。

大地が先に外に出た。真人はその後について行きながら「最後に一度」と思い、振り返った。ふいに、一週間ほど前のことが思い出された。習慣となっている午前中のスーパーでの買い物から、部屋に戻ってきた時の記憶だった。

その日は十一月の終わりには珍しく朝から気温が高かった。

部屋に入るなり、汗の匂いがつんと鼻腔をさした。男くさいとも感じた。部屋の奥に目をやると、コインランドリーに持って行くつもりの衣類が寝袋の横に置きっぱなしになっていた。

ここは、おれの部屋だ――。その時は、そんな気持ちを味わっていた。

今は、あの部屋にその匂いはない。

第8話 眠る

＊

この人は、いつ眠るのだろうか？ 大地と暮らすようになって、すぐに真人が抱いた疑問は睡眠だった。二人だけの共同生活といっても、大地は住まいを不在にすることが多い。家にいる時間帯は不規則だ。

今住んでいるのは古い倉庫のような建物だ。二カ月前、E Xの山岡の家から連れ出され、バイクのリアシートに座らされて何時間もあちこちを回った。そのとき、大地が二カ所立ち寄った場所がある。どちらも、古い家が並んでいる一角にあった。ここは、その二カ所のどちらかだと真人は思っている。

二階建てで、正面は下ろしたきりのシャッターになっている。その脇にある、いかにも取って付けたようなドアから出入する。

一階はがらんどろだ。ありふれたコンビニくらいの広さがあり、下はコンクリートで何も無い。せいぜい、大地がバイクを置くくらいだ。奥にアコーデオンカーテンが引かれている。カーテンの向こうがキッチンになっていて、隅にシャワーだけのバスルーム兼トイレに通じる曇りガラスの折り戸がある。

初めてここに来た日に、尿意を我慢していた真人は、まずトイレを借りた。バスルームは規格品のせいか、中に入ると、二カ月前暮らしたアパートに戻ったような気がした。用を足し、キッチンにちらりと目をやったのち、カーテンの外に出ると、再び何も無い空間が現れた。あらためて周りや天井を見回していると不安が募ってきた。

「ここは、元は工場だったんだ」

バイクをいじっていた大地が言った。

「何を作る工場だったんですか」

「さあ、知らない。考えたこともない」

素っ気ない言葉が返って来た。

これから先こんな所に住むのかという戸惑いよりも、一緒に住むことになる相手に対する懸念のほうが大きかった。

住居は二階だ。階段を上がりきると、小さめの流し台があり、その上の壁には鏡とラックとタオル掛けが取り付けられている。ラックには、マグカップ二個、食器用の洗剤、ハンドソープ、スポンジが載っている。蛇口からは、常にぼたぼたと水が漏れている。大地はパッキンを取り換えようとはしない。一度、そのことについて真人が触れたことがあった。

「水が落ちる音を聞いていると、気が休まるんだ」

大地からは、そんな言葉が返って来た。そうした意表をつく大地の言動にも、真人は慣れた。

流し台から奥の壁までの間には何も置かれていない。空手や柔道の道場を思わせる広い空間が、頑丈そうな木製の壁で二つに仕切られている。

仕切りの壁には金属製のドアが取り付けられている。ドアにはノブのロックだけでなく、大地の額の高さにもう一つ錠がついている。そのドアを開けると、生活スペースとして使われている十畳くらいのフローリングがある。

真人は、最初はその「部屋」に入った時の印象を覚えている。また、何もない部屋だ――。一階のキッチンで見たものよりも小型の冷蔵庫があるだけだった。その部屋の奥には木製の大きな引き戸がある。そこを開けると、家具や調度品や生活用品が収納されているの見える。

折りたたみ式の華奢なテーブルと椅子、布団、本やDVDやCDの入った棚、CDラジカセ、エアコンのリモコン、キャスター付きのラックに収まったテレビとDVDレコーダー、ノート型パソコン、掃除機、衣装ケース、布製の洋服ロッカーなどが詰まっている。

引き戸を開けて中を覗くたびに、真人は整然と雑然が混在しているような妙な感覚に陥る。何でもクローゼットにしまい、必要なものを必要な時に取り出すというのが大地の習慣だった。帰って着たとき、使われていない物が部屋に置いてあると、大地は無言でそれを片付ける。ティッシュの箱やくずかごすら、片付ける。真人も大地のやり方に染まってきて、用のない物はすぐにクローゼットに戻すように心がけている。

一緒に暮らすようになってからは、「何もない部屋」には座布団と真人のデイパックが置かれている。それだけには、大地は手に触れようともせず、勝手にクローゼットにしまうこともない。

この人は、いつ眠るのだろう？

こんな奇妙な住まいに大地がいる時間は、どれくらいなんだろう？ 真人は、過去数日間を思い出し、何度か指を折って計算してみた。平均して、二十四時間のうち十時間前後だろうという結論に達した。夕方に帰ってきて夜中に出て行くか、朝に帰って来て夕方か夜に出て行く。

「大地さんって、お仕事は何をなさっているんですか」

ここに来て、二日目に勇気を出して尋ねてみたことがあった。

「力仕事」

「建設現場とか？」

「うん」

「大変ですね」

「まあな」

帰って来た時の大地の体臭や雰囲気、力仕事をしているとは思えないが、真人はそれ以上、追及しなかった。

共同生活と言っても、大地の生活のリズムは不規則でいつ帰って来るかは予測ができない。真人は、以前のアパートにいた時と同様に、早朝にジョギングをし、午前中に買い物をし、後は筋肉トレーニングや空手の構えの練習をするようになった。テレビは見てもいいが、CDとCDラジカセには手を触れるなど言われた。

帰って来た後の大地は、体を休めて眠るのかと思っていると、そうでもない。音楽を聞いたり、テレビを見たり、新聞を読んでいることはある。向かい合って、ご飯を食べることもある。ただし、食事は一階のキッチンにある小型のテーブルに着いている。

真人は大地の行動を見ていて、二階の部屋では、ミネラルウォーターやジュースを飲むだけにして、チョコレートやスナック菓子を口にするのは控えている。大地自身が、二階で何かを食べることはない。初めてここに来て以来、冷蔵庫にはペットボトル入りのミネラルウォーターしか入っていない。真人の飲むジュースは、一階のキッチンにある大型の冷蔵庫の中にある。飲み終わると、いつも大地がするように、真人はすぐに二階の小さな流し台でマグカップを洗う。

一緒にいる時には、昼夜を問わず、大地は真人の相手をしてくれる。人けのない川原や草地で、真人にバイクの運転の仕方を教える。空手の練習相手になってくれる。近所をあちこち連れ回し、いろいろなことをぼっそつとつぶやく。

「こういう直線の道は逃げるのには適さない」、「逃げていて、この角に差しかかったら、どっちの道を選ぶか」、「砂利道はこうやって歩けば音が立たない」、「あの路地は、白パイが隠れて見張る場所だ」、「この家の犬は敏感でよくほえる」、「あのアパートの二階……。突き当りの部屋では、親が幼い子どもを虐待している」、「その隣の部屋の男は電車専門の痴漢だ」、「この二百メートルの先に警察官の独身寮がある」――。

身の周りにあるちょっとしたもの――ボールペンやパチンコの玉や花瓶など――を武器として使う方法も習った。Y字型の玩具のパチンコを改良した小型のスリングショットの使い方については、かなり厳しく教えられた。川原では、パチンコ球、小石、こぶしくらいの石をいろいろな体勢から、スリングショットを用いてと素手で投げる両方のやり方で、正確に目標に当てる練習をさせられた。

夜遅くなって真人が眠そうにしていると「もう寝ろ」と言って、自分は電気スタンドを使って本を読んでいるか、一階で何かをやっている。眠っているところを見ることがない。

一緒に時を過ごす、大地は「じゃあ、あとを頼む」と言って、バイクか徒歩でどこかへ出掛ける。バイクは三台持っている。一階に三台駐車してある時もあれば、一台もない時もある。

いつ眠るのだろうか？　どこかに寝る場所か、別の住まいがあるにちがいない。興味があつたが、真人は尋ねなかった。必要なこと以外は喋らない相手だ。

「中川さんって、いつ眠るんだろう。眠るところを見たことがない」

EXのメンバーではいちばん信頼できる玉井久美に、電話越しにそれとなく尋ねた。

「ね、やっぱり謎の人でしょう」と、携帯電話越しに玉井が笑いながら言った。「これは別に秘密でもないから話しておくけど、わたしたちの推測するところでは、中川さんは一種の睡眠障害なんだと思う」

「眠れないとか？」

「そうかもしれない。でも、人間はまったく眠らないわけにはいかないから、眠る時もあるはず。そのリズムが普通の人とは違うんじゃないかしら。詳しいことは知らないわよ。」

あくまで推測なんだけど」

「じゃあ、どこで眠ってるのかなあ」

「聞いてみれば？」

「ええっ？ 嫌だよ。怖いんだもの」

「もっとコミュニケーション取りなよ。たぶん、あの人にとって、今、いちばん親しい相手は君だと思う。だって一緒に暮らしているんでしょ」

「一緒に暮らしているって言えるのかなあ」

＊

「寒くなってきたけど、今住んでいる所は暖かいの？」

ある日、祖母との電話の最中に聞かれた。

「大丈夫。ホームレスでいるわけじゃないんだから」と言いながら、コミュニンの冬の寒さを思い出した。弟の雄詞が、同年の男子児童と同じ布団で裸の体を寄せ合って眠っているさまを想像した。真人はエアコンのある部屋で寝ている。眠る時には付けることはないが、寒い夜に使うことはある。

あそこから奪い返してやらなきゃ――。

「あっ、お祖母ちゃん、この間池田さんから渡してもらったお金、いつもより多かったよ」

「冬だからね。東京の冬はあそこと違って風が強いから、着るものとか、ちゃんと考えて買うのよ」

「分かってるって――。それより、アルバイトっていうんじゃないけど、ちょっとした手伝いみたいなことをして、前より生活費がかからなくなってきたんだ。当分、お金をEXに預けなくてもいいよ」

EXを通して祖母から仕送りしてもらっているお金には手をつけず、二階の部屋のクローゼットにしまっている。

「どうして。働くとか、何か始めたの？」

祖母には、EXのメンバーの家に居候させてもらっていると伝えてある。大地はメンバーではなく一種の協力者とみなされているようだが、まったくの嘘ではない――。真人は自分に納得させる。食費、家賃、日用品に関する限り、不自由はしていない。だが大地との共同生活について話すのには、ためらいがあった。

「だから、お手伝いみたいなことだって。心配しなくていいよ。おれの分、雄詞に回してやってくれる？」

「雄詞はいいのよ。余分に送ればコミュニンに取られるようなもんだから」

「とにかく、当分は、お金は要らない。必要になったらちゃんと言うから、貯金しておいてよ」

一緒に暮らすようになってから、食費だと言って、大地は毎日お金を渡すようになった。真人は、大地の性格を考えて遠慮はせず、礼を言って素直に受け取っている。金額はまちまちだが、食費にしては多い。

＊

寒くなってきた。

ある日の平日の午後——。大地から渡されたお金がたいぶ溜まったため、真人は近くにあるショッピングセンターに行き、冬物の衣類を買い込んだ。靴も買った。

場所を取る、むくむくした素材の衣類が一挙に増えた。クローゼットの中にある空の衣装ケースを使ったり、ハンガーを掛けられるポールのある洋服ロッカーに服やパンツ類を吊るした。そのとき、大地の衣類がほとんどないのに気づいた。

考えてみると、大地がこの家で着替えるところを見た覚えがない。玉井は、大地が睡眠障害ではないかと言っていたが、大地にはほかに眠る場所があるのではないか——。真人は考えた。二カ月暮らしたあの部屋も大地のものかもしれない。初めてバイクの後ろに乗せられたときに、大地が立ち寄ったもう一つの場所も気になる。

そこで眠っているにちがいない。真人は思う。そして、どこかで仕事をしている。それに加えて、EXの活動も手伝っている。ご飯はたまにここで、自分で作って食べている。時間が合うときには、一緒に食べることもある。

真人はそうした想像と疑問を、玉井久美との電話の中で口にしてみた。

「ますます謎めいてきたわね」と、いつもの明るい声で玉井は言った。最初のころは、ちょっと気取った感じの女性だという印象を抱いていたが、今ではかなり打ち解けて話せるようになった。

「でしょう？　すごく不思議な人なんだ」

「前にも言ったと思うけど、わたしたちはあの人をメンバーだとみなしていないし、深くかかわり合っているわけじゃないの。現場での活動じゃなくて、金銭的な面で後ろから援助してくれる人たちを、EXでは『協力者』って呼んでいるのは知っているよね」

「玉井さんの彼氏も『協力者』？」

「沢田君は、お金はあまり自由にならない身だけど、以前君の世話をしてくれた時みたいに、お金には換算できない面でEXに協力してくれている大切な人」

「特に玉井さんにとっては大切な人だよ」

「それ、どういう意味？」

「からかって、すみません」

「事実だから、許してあげる——。でも、君が教えてくれた、その複数の住まいらしき話、参考になったわ。ただ、睡眠障害気味なのは、確かみたいよ。わたしたちの協力者のお医者さん覚えているでしょ？　君が熱を出した時に診てくれた人」

「あの時には熱でふらふらしていたから、ぼんやりとしか覚えていないけど——」

「よく眠れないって、中川さんがあのお医者さんに話したことがあるんですけど。一日の平均の睡眠時間が三時間以下だとか。それでいて、二十時間くらいずっと眠り続けることもたまにあるんだって」

「変だよ」

「変という言葉は好きじゃないから、使いたくないけど、そういう感じ」

玉井さんは大地についてもっと知っているにちがいない。真人は思う。

以前、EXの女性メンバーの池田を半分だますようにして「山方（やまがた）別荘事件」という言葉を引き出したことが、頭に浮かんだ。その「事件」に関しては、なるべく考えないように努めている。

「いつだったか、玉井さんに忠告されたように、中川さんのことは詮索しないでおこうと」

「そうね。それが無難だと思う」

『山方別荘事件』とかね」

真人は思い切って鎌をかけてみた。

「……」深呼吸をするような音が聞こえた。「ちょっと、真人君。どうして、そんな言葉をわたしに言ったの？ わたしは、君がその言葉を知っている訳は聞かない。聞きたくないっていう意味——。もう一度、忠告させてもらうわ。恩になっている人を裏切っちゃ駄目。あなたは、おそらくその恩人にとって一番近い人になりつつあるのかもしれないのよ。その人は、きっと君にその言葉を知ってほしいとは思っていない。それがわたしの意見——」

＊

一階にあるキッチン。

ワンパターンの夕食メニューとなった肉入りの野菜炒めを作りながら、真人は玉井から再度受けた忠告の意味を考えていた。

『中川さんは、過去に大きな心の傷を受けた経験があって、それがまだ治りきっていない。だから、初めて接する人には頭のおかしい人に思われてしまう』

確かそんなことも、以前に玉井さんは言っていた。おれは、まだ大地さんのかかえている心の闇の深刻さを理解していない——。おれは大馬鹿者だ。

そんなことを考えていると、アコーデオンカーテンの向こうでドアが開く音がした。真人は、レンジのガスを止めた。ドンと床に何か落ちたような音と共に、かすかな振動を足元を感じた。この家は通りを折れた路地にある。大地はたいてい、通りでバイクを下り、あとは家までバイクを押して来る。真人は左右二枚のカーテンの真ん中を開けた。「大地さん、ご飯食べますか？ おれ、ちょうど作り——」

バイクが倒れている。真人は、壁のスイッチに手をやり、小玉電球だけで照らされている一階の明かりを全部つけた。

バイクの下に大地の体が横たわっている。それほど大きな音がしなかったのは、ライダー用のジャケットとパンツを身に着けた体の上にマシンがゆっくりと倒れたからだろう。

真人はまずバイクを起すのに苦労した。大地の持っている三台のバイクのうち、一番大きなマシンだった。いったん起したところで、反対側に倒してしまった。今度は大きな音がした。下のコンクリートが揺れるのを感じた。

大地の体は横向けになっている。身長差は十五センチ、体重は大地のほうが十キロ以

上重いだろう。

「大丈夫ですか？ 起き上がれますか？」

真人は声を掛けた。

「殴ってくれ、おれの顔でも体でもいい、思い切り殴ってくれ」

思いがけない言葉に、真人は当惑した。

「ど、どうしたんですか」

「眠いんだ。お願いだから、殴るなり、蹴るなりして、おれがここで眠り込まないようにしてくれ」

もしかして『睡眠障害』——。

真人は、骨が当たらない部分を探し、大地の上腕と腿のあたりを力一杯叩いた。大地がうめいた。とにかく、二階まで引っ張っていこう——。真人は大地を仰向けにし、顔をまたぐ形でしゃがみ込み、両脇の下に手を差し込んだ。バーベルを持ち上げる体勢で腕を曲げて腰を浮かし、綱引きの要領で大地の体を引きずっていく。

二階の部屋に入ると、それまで半開きだった大地の目が大きく開いた。

「ありがとう。ここまで来れば安心だ」

「お医者さんと呼ばうか？」

「いや、医者と呼ばなくていい」

「本当に大丈夫？」

「心配するな。ときどきこういうことがあるんだ。慣れている。前触れを無視したのが失敗だった」と言って、大地は口を歪めて笑顔を見せた。

初めて見る笑顔だった。泣いているようにも見える。今、この人は、無防備な姿をおれの前にさらしている——。真人は幼児か赤ん坊を相手にしているような錯覚に陥った。抱きしめたくなるような、いとおしさも覚えた。

「このままでいいから、毛布を掛けてくれ。たぶん十時間以上は眠っているかもしれないけど、心配しなくていい。珍しいことじゃないんだ。そういう体質なんだ」

「布団を敷きましょうか？」

「あとは放っておいてくれ。ただ眠らせてくれ」

真人は大地の言葉に従うことにした。

＊

夜中。

一時間置きくらいに、大地が叫ぶ。何と言っているのかは分からない。

「大地さん、大丈夫ですか」

そのたびに真人は声を掛けるが、大地は目を覚まさない。真人は毛布にくるまった大地の隣に自分の布団を敷いて横になっている。今夜は眠れそうもない。

電気スタンドを壁に向けて照らし、間接照明にしておいた。広い部屋のフローリングが冷たく光っている。一定の時間を置いて冷蔵庫の音がする。ぶーんという音を聞いているうちに、真人は眠気を覚え、寝入った。

「おかあさん——」

ふと目が覚めた。

大地の声だったのだろうか。子どものような高い声だった。自分の寝言だったのだろうか。

真人は実母の顔を思い浮かべようとした。思い出せるわけがない。父親と別居したのが、真人が二歳の時だったという。協議離婚が成立したのは、四歳の時。五歳になって、新しい母親が来た。

おかあさん——。真人はつぶやいてみた。

第9話 逃げる

＊

夕方に中川大地が帰って来た時には、小田真人は心が騒ぐ。不安と期待が混じり、体が火照る。徒歩で家を出て、さまざまな場所に連れて行ってもらえる。大地と一緒になら心強い。夕方以降に遠出もできる。

夜間に外出をすれば、見回りの警察官から職務質問される可能性が高い。喧嘩好きな若者や、自分より弱い者から金を巻き上げようとする者たちが目を光らせている。真人は、早朝のジョギングと、午前中の買い物以外の外出を避けている。

自分は「行方不明」の身だということを常に意識している。何かのトラブルに巻き込まれ、その結果として警察に保護されれば、「行方不明」という状態ではなくなる。つまり、親権者である父母のいるコミュニンに連れ戻される。

コミュニンからの脱出に手を貸し、脱出後にさまざまな援助してくれたすべての人たちの好意が無駄になる。あのロボットか家畜のようなコミュニンの住民の一人に逆戻りする。

「おまえは、なぜ、ここにいるんだ」

ある日、一緒に家で夕食をとったあと、大地がいきなり尋ねた。

真人が食器を洗い、大地がその食器をふきんで拭いている最中だった。大地は唐突な質問や言葉をよく口にする。真人は慣れてきたが、内容によっては面食らったり、戸惑って言葉に窮することがある。

「分かりません」、「急にそう言われても……」、「さあ——」としか言えない場合も多い。真人が曖昧な返事をして、それ以上追究されることはない。そのまま会話が途絶えたり、別の話題に移るだけだ。少し考えた後に返事をする、自分の言ったことを忘れているらしく「何、それ？」と聞き返されることもよくある。

「なぜ、ここにいるんだ」

大地は同じ質問をした。こんなことは初めてだ。

「急に言われても」

「じゃあ、考えろ」

どうして、おれはここにいるんだろう。真人は洗い物が終わった後も考え続けた。大地によってかくまわれている。間接的な形でEXによって支援されている。祖母からの援助も受けている。それが現状だ。

でも、なぜ、ここにいるのか。この家に暮らしているというのは、おれにとっては日常的なことだ。現実だ。でも、その毎日繰り返している行動の意味と理由が、おれには分かっていない——。

『何でもそうだ。自分で考えろ』と大地が言ったことがあった。真人が寝ていた山岡のアパートに大地が押し入り、『おまえ、ここを出ろ』といきなり言って、真人をバイクの後ろに乗せた日のことだった。真人は、「何もない部屋」のあるアパートに連れて行かれ、そこでたった一人で二カ月間暮らした。

あの二カ月間、おれは少なくとも毎日、考えていた——。一人で生活するためには、いろいろなことを考えざるを得ない。真人は思う。でも、大地と一緒に生活している今、おれは何も考えなくなった。大地に従っているだけだ。

夕食の後片付けが終わり、二人は二階に上がった。

大地は真人に背を向けて、CDを聞いている。真人は大地の背中を見つめていた。なぜ、ここにいるのかを考えろ——。大地の背中が、今もそう言っているような気がする。「大地さん、おれ、どうして自分がここにいるのか分かりません。考えていませんでした」真人は大地の背中に向かって言った。

ピアノの演奏が途中で止んだ。大地はCDを何枚か持っているが、どれもがピアノの独奏だ。クラシックやピアノに疎い真人には関心がない曲ばかりで、どれも同じに聞こえる。退屈で仕方ない音楽だ。ほかの音楽を聞いてみたいと思うが、CDとCDラジカセには絶対に触るなど大地から言われている。

「考えていないって言うのか？」

「これまでは、そうでした。でも、今、考えているけど分からないんです」

フローリングにあぐらをかいたまま、大地がゆっくりと体を回した。目と目が合った。大地が視線を合わせてくることは珍しい。真人は自分の体が小刻みに震えているのを感じた。

「おまえは逃げているんだ」

「えっ？」

逃げている——。拍子抜けのする言葉が返って来た。確かにおれは逃げている。そんなの当たり前じゃないか。だから、ここで、かくまわれているんじゃないか。真人はいら立つ。だが、大地の口を通して聞くと、当たり前のことが当たり前ではなく思えてくる。

逃げている——。真人は考える。幾通りかの意味に取れる言葉だ。おれは自分の置かれた立場と、この先どうするかについて考えるのを避けている。それを『逃げている』と言われれば、返す言葉はない。コミュニケーションやG友の会や警察から逃げている。大地と真正面から向き合うことも避けている。それも『逃げている』と言える。そういうこと全部が、おれにとって『逃げている』という言葉の意味にちがいない。

「おまえは逃亡者だ。成年に達するまでは、逃げまくるしかない。もちろん、逃げるのをやめて、保護者のもとに帰ることもできる。裁判で闘うという手もある。それが嫌なら、逃げ続けるしかない。ただ、たとえ裁判で勝っても、逃げ続けるしかないかもしれない。成人になっても、逃げ続けるしかないかもしれない」

「自分が逃げていることぐらい、おれにも分かります」

「分かっている。考えてもいない」

「じゃあ、おれ、どうすればいいんですか」

いら立った真人は声を張り上げた。

「考えて分からなければ、動くんだ。動いているうちに、分かることがある。その分かっ

たことが間違っている場合もある。それでも、動いただけの価値はある」

そこまで言うと、大地は再びCDを聞き始めた。

真人には大地の言った意味が分かるようで分からない。うつむいて、大地に悟られないようにため息をついた。

「おれ、この曲が大好きなんだ。この曲がなかったら、おれはきっと生きてはいけない」

大地が唐突に言った。

「……………」

真人は言葉に詰まった。

「なぜだか分かるか？」

真人は大きく首を横に振った。

「おれも逃げているからだ」

「意味が分かりません」

「そうだよな。ごめん」

「別に謝らなくても」

「いや、混乱させて悪かった。謝る。おれの今までの人生って、逃げることの連続だったんだ。世界には、たぶん、たくさんの逃げている人がいると思う。一人ひとりが違った事情や意味で逃げているのだと思う」

「大地さんは、何から逃げているんですか」

真人が尋ねると、大地は再びCDを止めた。

「夢からだと思う」

「夢？」

「うん。眠るのが怖かって気持ち、分かるか？」

数日前に、夕方に帰ってきた大地が、一階で倒れ、二階で十二時間ほど眠り続けていたのを真人は思い出す。あの時の大地は眠りながら、何度もうなされていた。大地が眠っている姿を見たのは初めてだった。

「夢に何か出てくるんですか」

「うん」

眠る直前に真人に見せた大地の恥ずかしげな笑みが頭に浮かんだ。あの瞬間、小さな子どもに対していただくことがある、いとおしさにも似た気持ちになったのも思い出される。

「それに——」と、大地はゆっくりとした口調で話し始めた。「眠るって、死ぬことに似ていないか？　自分が寝入る時もそうだし、他人が眠っている姿も死んでいるように見える」

「……………」

思いもつかない話に、真人はどう言えがいいのか分からなくなった。

「逃げてみないか？」

またもや唐突な言葉を大地は口にしていく。

「一緒に、どこかに逃げるんですか」

真人はジーンズのポケットから携帯電話を取り出し、時刻を確認した。午後九時十一分。

「ごめん。そういう意味じゃない。おれ、話すのが下手だから、混乱するだろう？」

「はい、少し——」

真人は正直に答えた。

『情緒が不安定だって意味、分かる？——』

『トラウマって言葉は分かる？——』

『中川さんは、過去に心に大きな傷を受けた経験があって、それがまだ治りきっていない。だから、初めて接する人には頭のおかしい人に思われてしまう——』

このところよく思い返す、EXの玉井の言葉が頭の中で響く。

「逃げると言っても——」大地は間を置いた。「口で言っても分からないと思うから、外に出てみよう。バイクに乗る用意をしろ」

真人は、ライダー用のジャケットとパンツに着替えた。この家に来た翌日に大地が買ってくれたものだ。ジャケットもパンツも、やや大きめのサイズを大地は選んだ。確かに冬は、普段着でバイクのリアシートに乗せてもらおうと、空気の流れをまともに受けて寒さが身に染みる。特にフリースは、風の強い日には適さない。

真人が階段を下りると、大地は三台あるバイクのうちで二番目の大きさのバイクの点検をしていた。バイクの傍らには、古びたナンバープレートが置かれている。取り替えるのだろう。直感が働いた。

「小便をしておけ。今夜は冷える。バイクに乗っていて途中で小便をしたくなったら、すぐに言え」

「はい」

「逃げる時には、膀胱と胃と腸の中が詰まっているのが一番悪い。よく覚えておけ」

バスルームで放尿をしながら、真人は考える。これから二人でどこか遠くへ行くのだろうか？ 『逃げよう』というのは、そういう意味なのか？ 『ただ、逃げるだけだ』というのは、どういう意味なのだろう。大きな身震いが来たが、すぐに収まった。心だけが騒ぐ。

真人は、リアシートをまたいで大地の背中にしがみついている時間が好きだった。大地は時々かなり荒っぽい運転をする。車を猛スピードで追い抜く。バイクやスクーターと競争する。このまま事故で死んでもいい、この人と一緒なら——。そんなとき、真人は思うことがある。

＊

十五分ほど走って、大地はバイクを止めた。

「すぐに戻る」

寺の横に残された真人は、寺の屋根と、葉を落とした大きな銀杏の木を眺めながら、思い出した。山岡のアパートから連れ出されてあちこち回った早朝にも、大地はここでバイクを止めた。あの日には、銀杏の木には葉が生い茂っていた。真人は時の経過を感じた。

今は暗いが、月明かりに照らされた寺とその周辺の古い家並みに記憶がある。絶対に、ここだ。真人は確信する。この辺りに、大地のもう一つの「家」があるのかもしれない。

大地は十分ほどして戻って来た。ウェストバッグを身に着けている。再びバイクを発進させた。

バイクのスピードがいつもよりやや遅いのに、真人は気づいた。大地は無駄なエネルギーを消費せず、今は力を蓄えている。そんな気配を感じる。

＊

「あそこで何かを買って戻って来る自信はあるか？」

深夜営業をしているコンビニの近くでバイクを止めた大地が言う。コンビニの前には、十代の半ばかそれより少し上に見える三人の少年たちがしゃがみこんでいる。そばには二台のスクーターが駐車してある。

「あいつら、やばいんですか？」

「かなり」

「まさか、店に入れて言うんじゃないですよ。そして、ガンをつけてきたあいつらを振り切って逃げろとか？」

さっき大地が口にした『逃げてみないか？』が、そんな意味だとすれば——。そう考えた真人は、手と足が震え出すのを感じた。

「きょうは、やめておく。でも、いつか練習しよう。その時には、おれも手伝う」

視線を察知したのか、三人のうちの一が真人たちのほうを顎で指した。残りの二人もこっちへ目を向ける。真人は急に尿意を覚えた。足ががくがく震え出す。おれには、まだ一人で逃げるだけの力がない——。真人は思う。

「乗れ」と大地が指示し、バイクを発進させた。前より、スピードが出ている。

「おれ、小便したいです」

真人は後ろから大地の耳に向けて怒鳴った。

「分かった」

返ってきた大地の声が温かな風の玉となって、耳元をかすめて背後へと飛んで行ったような気がした。真人は耳の火照りを感じた。

草地に着いた。

そばにラブホテルのネオンサインがきらめいている。真人と大地は二手に分かれ、それぞれ隅に行き放尿をした。

戻った二人は、バイクを挟んで向き合った。

「おまえ、この国で一番強いボディガードをつけているやつって誰だか、分かるか？」

また唐突な質問をされた。

真人は、毎日のテレビのニュースで出て来る政治家の名を三つ挙げた。

「違う」

大地は、そのどれも否定した。

「じゃあ、警察のトップ？」

「違う。警視総監でも警察庁長官でもない」

「それって、どう違うんですか？」

「自分で調べろ。もし、無事に帰れたらな——」

無事に帰れたら？ 真人は気になった。だが、その意味を尋ねるのをためらわせるような真剣さが、今の大地にはある。

「あとは暴力団の組長くらいしか、考えられません」

「違う。そんなやつらは、本気になれば簡単にやれる」

「だったら、なぜやられないんですか？」

「本気になって、やろうとするやつがないからさ」

「本気になる？ ひょっとして、自爆テロみたいに自分も死ぬって意味ですか」

「死ぬのは自分だけじゃない。自分の家族や自分にとって大切な人も、社会的に葬られたのと同然になる。死ぬとか殺すとかいうのは、自分だけや相手だけの問題では済まない」

山方別荘事件、カルト集団、教祖、マインドコントロール、集団服毒自殺、生き残った子どもたち——。そうした言葉が真人の頭に浮かんだ。

「ふーん。じゃあ、最初の質問に戻るけど、答えは誰なの？」

「知りたいか？」

「はい」

「本当に知りたいのなら、教える。ただ、名前では教えない。名前で知っていても何の意味もない。そいつが住んでいる場所に行けば分かる。誰だか分かるっていう意味じゃない。命をかけて逃げるっていうことの意味が分かる。その意味を知りたいか？」

「……………」

「知りたいか？」

この人は、今、おれを試している。真人は、とっさに判断した。知りたくない——。そう答えれば、きっと、おれはこの人に見捨てられる。

真人は大きくなずいた。

「来い」

＊

三十分ほど走った。

五、六階建てのビルが並ぶ一角で、いったんバイクを降りた。人けはない。人が住んでいる気配もない。たぶん、オフィス街だ。真人は思う。

大地はウェストバッグを開けた。透明のプラスチックの袋に入ったクラッカーボールを真人に見せた。

「これ、癩癩球？」

「そうだ。二十個ある。どういうものかは知ってるよな？」

「はい」

「これからかなりスピードを上げて十五分ばかりバイクを走らせる。左右に蛇行させるこ

ともある。しっかり、ベルトにつかまっていて、絶対に振り落とされないように注意しろ。おれが両ひじを何回か続けて曲げたら、これをばら撒け。二回合図するから、半分に分けて十個ずつ放り投げろ——。まず、グラブを取れ」

ここで大地は沈黙した。真人は両手のグラブを外し、それぞれをライダー用ジャケットの両ポケットに突っ込んでファスナーを上げた。大地がクラッカーボールの入った袋を手渡す。

大地はリアシートに乗った状態で、どうやってクラッカーボールを手から放り出すのかを教えた。

真人はクラッカーボールを袋から取り出して目分量で二等分し、左右の手のひらに乗せた。大地の指示通りに両手を動かす。大地がかすかに頭を動かしてうなずいた。

「よく聞け。おまえがバイクから振り落とされても、おれは助けない。おれは逃げる。それでも、いいか？」

思いがけないことを言われた。大地はおれを置き去りにして逃げると言っている——。真人はその言葉の意味を考える。その言葉に裏の意味や深い意味なんてない。言われた言葉が、そのまま行動に移される。それだけだ。要は、自分が望まない結果にならないように努力すること。それしかない。

真人は迷ったが、無意識のうちに大きくうなずいていた。うなずいたことに、後悔はない。

「もう一つ、言っておく。場合によっては、おれのバイクが転倒するか、やつらに追いつかれる可能性がある。その時は、おれとおまえは二人とも、無事であの家に戻ることは絶対はない。それでも、いいか？」

一瞬、頭の中が空白になった。体が震え出す。真人は歯ぎしりをしている自分に気づいた。再び、大きくうなずく。

「小便をさせてください」

ようやく、その言葉が出た。

＊

午後十時五分——。

大地はその界隈を知りつくしているかのように、路地を右に折れたり左に折れたりしながら、進んで行く。あてずっぽうに、バイクを走らせているのではないらしい。何度も左右に折れながら、ある一点に向かって着実に突き進んでいるのを、真人は感じる。窓に明かりのない、黒っぽく見える雑居ビルらしい建物が立ち並んでいる。

いきなり、バイクのスピードが上がった。周りに複数の人の足音がする。威嚇するような声も聞こえるが、バイクのエンジンの音でよく聞こえない。自動車の急発進する音もする。

バイクが左折する。いきなり、広い道路に出た。交通量が多い。さらにスピードが上がる。バイクは、次々と車を追い越していく。真人は身を低くして、必死で大地の腰にしがみつきベルトを握りしめている。

大地の両ひじが真人の両腕を乱打した。真人は指示された通りに、まず、右手の人さ

し指の爪を親指の腹に押しつけ、思いきり人さし指を弾いた。人さし指の先に紙ひもで束ねられたクラッカーボールの塊が右後方へと飛び去って行く。後ろで破裂音が響いた。

気が付くと、左側に屋敷の塀らしき白っぽい壁が続いている。二度目の合図に従い、左手の人さし指と親指を使って、さっきと同じ方法でクラッカーボールの塊を飛ばす。背後から、人の声、車の音、破裂音が一緒になったような大きなけたたましい音が聞こえた。

＊

真人と大地は、黙ったまま、明かりを落としたがらんとした部屋で、ピアノ曲を聞いている。

「この曲、何って言うの？」

「知らない。曲の名前なんて知りたくもない。でも、ピアニストの名前なら知っている」

「誰？」

「グレン・グールド」

「もしかして、ここにあるピアノのCD、全部、その人が弾いているの？」

「そうだ。おれの母親がよく聞いていたんだ」

いつも退屈だと感じている曲が心に染み入って来るのが、真人には不思議だった。

真人は考える。バイクで通り過ぎた、あの大きな屋敷の主が誰であるかは知らない。その名前など知りたいとも思わない。ただ、疑問は残る。あの屋敷の主を守っているやつらは誰だ。車で追ってきたやつらは誰なのだろう。組織に属している人間たちであることは間違いない。コミュニケーションに相通じる強固な組織の匂いがする。

あのすすけた感じの街はどこだったのだろう。逃げる途中で見た、病院にも似た巨大な建物は何かだったのか。かすかに薬臭い感じがして、病院を連想したが、あれは錯覚だったのか。

おれたちは追われていた。それなのに、パトカーのサイレンの音を聞かなかったのはなぜか。追って来たのは警察官ではない。誰かを中心にがちがちに固まった組織にちがいない。上からの命令通りに動くロボットのような人間たち――。

だが、おれたちは逃げた。逃げるのに成功した。逃げるのがどんなに怖いか、どんなに難しいかが分かった。それだけではない。逃げるためには、考えることと日ごろからの準備が必要だ。それが分かっただけでもいい。

冷たく響くピアノの演奏を耳にしながらも、興奮は冷めやらない。

第10話 決行

＊

逃げる用意はできている。

盗んだスクーターの置いてある場所までのルートは考えてある。足はコミュニケーションにいるコーチの誰よりも、おれのほうが絶対に速い。それには自信がある。真人は思う。万が一、取っ組み合いになった場合には、あいつらなら素手で倒せる。深手を負わせないだけの武器に代わるものもポケットに入っている。

二人が近づいてくる。やはり緊張する。体がかすかに震える。擦れ違う。視線は合わせない。二人の歩調に乱れはない。

気づいていない。気づかれなかった——。真人は安堵した。

隣町にあるビジネスホテルで、何度鏡の前に立っただろう。長めの髪、度が入っていない眼鏡。あれから五カ月半経った。筋肉が付き、体重も増えただけではない。

「おまえ、背が伸び始めている」

中川大地がそう言ったのは、二カ月間を一人でアパート暮らしをした直後のことだった。

「もっと肉を食ったり、乳製品をとったほうがいい。それから、体操にジャンプを取り入れろ」

鏡に映った自分は実際の年より上に見えた。大地が渡してくれた都内の大学の学生証には、眼鏡を掛けた顔写真が貼られている。コミュニケーションから出た時の自分とは、別人のように見えるはずだ。写真の端には凸凹のスタンプが押されている。氏名は大島慎一郎とある。

二人のコーチに気付かれなかったのに気を良くした大地は、コーチたちが出て来た店に入った。

「いらっしゃいませ」

店内には、知った顔の大人たちが、目に付いただけで五人はいる。商品を見て回っている振りをして、一番奥にまで進む。店内と事務室兼倉庫を隔てているドアの向こうにも人のいる気配がする。

リスクは最小限にしろ——。大地の助言を思い出し、一二五ミリリットルの紙パック入りの野菜ジュースだけを買って外に出る。パックに印刷されている文字を読む。

『有機野菜・無農薬野菜だけをしぼりました。環境にも体にもやさしいジュースです』

嘘ばかり、こんなもの飲めるか——。すぐそばにドリンクの自動販売機を見つけた。その横にあるプラスチック容器の口に、未開封のパックを放り込む。

スクーターに乗り、それが止められていた駐車場まで戻る。あった場所から少し離れた隅に放置する。本番までは、バイクではなく、なるべく小型のスクーターか自転車、それもできるだけ古いものを盗むようにと、大地に言われていた。

「スクーターや自転車を使ったら、早めに元の場所の近くに帰しておけ」
「それだと、探している人に見つかっちゃうじゃないですか」
「ごめん。言い方がまずかった。二十四時間後の翌日くらいまでがいい。近くってというのは、盗んだ場所が目に見える位置という意味だ」
「見つかりそうで何だか怖いな。遠くじゃだめですか？」
「おれの経験だと、元の場所に近いほうがいい。そのほうが事件にならない。警察沙汰にならないって意味だ——。それに、もし見つければ逃げればいい。逃げる練習は十分にしたじゃないか。おまえは、足が速いし、逃げるのがうまい。ただ、あんまり盗むなよ。盗難が続くと警察の見回りが増える」

大地との会話を思い出す。

大地からは、さまざまな種類の、自転車、スクーター、バイクと、それに付属したロックや鍵の扱い方を習った。必要な工具や工具の代用品となる物の使い方の知識も得た。長時間使用しても大丈夫なスクーターやバイクと、すぐに盗難届けが出される可能性のあるものをどのように見分けるかも細かく教えられた。

学校は春休みに入っている。町を歩くと児童や生徒たちの姿が目につく。防犯ブザーを身に着けた子どもたちが多い。

二年前の春休みに、コミュニンに入るための最終的な合意が家族間で得られた。最も積極的だったのが父親だった。最初にG友の会の購買会員となり、さらに正規会員になったのは母親のほうだった。うさんくさいとか怪しいと言って非難していた父親が、いつの間にか母親より熱心な賛同者になっていった。

一貫して批判的だったのが、千葉県に住む父方の祖母だった。

「孫たちは、わたしが預かります」

祖母は、しつこく何度も真人の両親に訴えた。

「せめて、真人だけはわたしと暮らすようにしましょう」というのが、祖母の最終的な譲歩案だった。「高校受験もあるじゃない。コミュニンでは高校への入学が許されていないのは知ってるでしょ？」

「おかあさん、それば誤解です。高校進学も認められています」と、父が反論した。

「ええ、認められていますよ。例外的にね。自動車整備とか、農業とか、電気関連の学科だけなら、ごく一部の生徒に認められていることは知っています。コミュニンにとって都合がいいから。でも、大学進学を旨とするは無理ですね」

「大学に入るだけが幸せへの道ではありません」

「わたしはそんな議論をしていません。子どもの選択の余地がなくなると言っているんです。あなたは、いつからそんなに視野が狭い人間になったの？」

そんな激しいやり取りがあったのを、真人は覚えている。

「真人、おまえの判断に任せる——」

父親がそう言ったとき、真人は深く考えずに、コミュニケーションに入ると答えた。家族が一緒にいるのが自然なことだと思ったからだ。

真人は今の母親から産まれた子ではない。真人の実母と父親は、真人が四歳の時に協議離婚した。その二年前から別居状態だったという。実母についての記憶は真人にはない。祖母は真人の実母のことを良くは言わない。物心がついた時には、真人は祖母と父親のいる大きな家で暮らしていた。

実母が千葉県で中学の教師をしていて、未だに独身だという話を、祖母から聞いたことがある。真人は実母について考えることはやめようと思った。

父親は離婚の翌年に再婚した。結婚を契機に、父親は祖母のいる実家を出て、社宅に住むようになった。三人での生活が始まった。幼かったあの時期に、新しい母親に懐こうとさまざまな気遣いと努力をしたことを真人は記憶している。

『おかあさん、チューして——』

『おかあさん、大好き——』

『きれいなおかあさんがいて、ぼくうれしい——』

そんな言葉を口にした。自分が新しい母親を好きにならないと、父親と母親がいつもにこにこしている家にはならない。内心では、そういう心遣いがあったことをよく覚えている。弟が生まれた時には、大げさに喜んで見せた。家に訪ねて来た近所の人の前で何度かおしめを替えてやり、褒められるたびにうれしく思った。

あれは半分、いや全部が演技だった——。真人は思うことがある。

五歳年下の弟の雄詞は、体が弱くて、何をやるにも積極的に振る舞える性格の子ではなかった。真人は何かにつけて、雄詞を助け、その保護者役を果たした。雄詞には常に真人を頼る癖がついた。

コミュニケーションに入るのに際して、真人は祖母からいろいろな忠告を受けた。

「お父さんとお母さんは、悪い夢を見ているのよ。いつか、夢から覚めてくれると、わたしは信じているの。でもね、あなたたちが入ろうとしているコミュニケーションという所——。あそこは入ったら最後、夢から覚めるチャンスはなくなってしまうかもしれない、恐ろしい所なの。」

「どうして？」

「コミュニケーションに入り口はあっても、出口がないから」

「本当？ 何だかゲームに出てくる魔法の館みたい」

「魔法の館？ そこにも出口がないの？ いいかい、コミュニケーションを支配している人たちは、お父さんとお母さんの預けるお金や財産がほしいだけ。いや、それだけじゃない。お父さんとお母さんとあなたたち兄弟が、命令されたことを黙って聞いて、農作業をする人間になるのを望んでいるの」

「大丈夫だよ。お父さんは強いもん」

「いいえ、あなたのお父さんは夢を見ているうちに、弱い人間になってしまった。考えることができない人間になってしまった」

祖母の訴えは真人の心には響かなかった。

お父さんとお母さんにとってのいい子。弟にとってのいいお兄ちゃん。真人にとっては、自分がその二つの存在であることがすべてだった。そうやって、いい家庭が成り立っている。そう思っていた。

＊

徒歩、自転車、スクーター、バイク。真人は三日間、コミューンの周辺と、コミューンのある町を回った。中川大地の家で、この地域の地図を広げ、大地からいろいろな助言を受けた。襲撃の方法、逃走経路の選択、東京への旅の手段について検討を重ねた。

「お父さんとお母さんは大人だ。自分で選んだことについては、自分で責任をとればいいのだと思う。でも、弟は違う。どう考えても、弟は犠牲者だ。出口のない魔法の館に閉じ込められている。出るか、中に残るかの選択の道を奪われたまま、あの中にいるんだ。逃げられないでいる」

真人は大地にそう言ったことがある。それに対し、大地は次のように語った。

「おれは、これまでずっと逃げ続けてきた人間だ。逃げている状態は、今でも変わらない」

「そんなことないよ。大地さんは、逃げているだけじゃないと思う。逃げながら、戦ってもいる」

「同じだよ」

「何が？」

「逃げるのも戦うのも同じだって。言葉にすれば、何でも同じになってしまう。言葉って、現実を嘘に変える道具だという気がする。逃げるが逃げないになることもある」

やっぱり、この人は変だ——。真人は思った。心の傷口がまだぽっくりと開いたままなんだ。でも、言葉は現実を嘘に変える道具だというのは分かるような気がする。木村将太がインタビューされたテレビ番組の録画を見た時のことを、真人は思い出した。

今、大地が口にしたのと同じようなことを、あのおれは考えていた。言葉は意味があるようで、実は空っぽなのではないか。知らないうちに中身がすり替わる手品師の箱ではないのか。まさか。そんな馬鹿なことが——。真人は混乱に陥った。

「大地さんの言っていること、おれには分からない」

「おれだって、分からないさ。ただ——」

そう言って大地は黙り、目を斜め下に向けた。真人には、大地が何かを考えてそれを言葉にしようと努めているように見えた。五分以上、二人は沈黙の中にいた。

「おまえがいたような組織には、不思議な力がある」と、大地は言葉を探しながらつぶやいているように、ゆっくりとした口調で話し始めた。「中にいると外に出たくなくなるんだ。というか、出られなくなってしまう。出口を目の前にしても——」

不吉な予感が真人の脳裏をかすめた。

「大地さん、逃げるは逃げるだよ。逃げるが逃げないになるなんて、考えられない」と、真人は大地の話をさえぎるように言った。

「もうじき、春休みになる。逃げるにしろ、戦うにしろ、チャンスだと思う。小学生なん

だろ？」

「弟のこと？」

「うん」

「四月から四年生」

「じゃあ、春休みがチャンスだ。学校が休みだったら、平日や夜間に子どもを移動させても目立たない」

「そうかあ。チャンスか——」

「それに、おまえも、だいぶ変わった」

＊

町の中を歩きながら、自分の目が長瀬友美を探しているのを感じる。友美の家の近くに行ってみたくなる。

この町を出た日の夜に千葉の祖母の家から電話して以来、友美の声を聞いていない。友美の手から奪い取った一口チョコの包み紙——。お守りにしていたあの包み紙は、この数カ月の間どこかでなくしてしまった。

会いたい。話がしたい——。真人は思う。だが、今はそのためにここに戻って来ているわけではない。探すのはよそう。長めの髪、度が入っていない眼鏡、コミュニケーションにいたら絶対にして着ていない服、増えた体重、伸びた身長。もし、偶然に見掛けたとする。そのとき、向こうがおれだと気が付いたら話す。気が付かなかったら、あきらめよう。

コミュニケーションには、周りが塀で囲まれた、学校くらいの広い敷地がある。その中に、幾棟かの建物が、それぞれ住居や本部や作業場として設けられている。それに付属して、畑、ビニールハウス、鶏舎、牛舎などが、敷地を取り巻くように散在している。

人口は約二百人と言われ、作業をする一般の住民と、その住民を監督したり監視する役目を果たしているコーチやリーダーと呼ばれる者たちに大別される。後者は二十人前後いる。あとは、コミュニケーションの上部組織であるG友の会の人間が、入れ替わり立ち替わりやって来て、全住民の指揮をとっている。こうしたコミュニケーションの住民の構成と指揮系統について、真人はEXの人たちから教えられた。

「集団指導体制というんだけど——」と、玉井久美が説明してくれたことがある。「あるカリスマ的なリーダーや教祖がトップにいて、その人が全体をまとめるという組織とは違う形をとっているの。複数の幹部が目立たないようにして、各要所を束ねている。だから、外からは、指揮系統や支配構造がとても見えにくい。何か問題を起こした時に表に出てくる人がころころ変わる。かといって、ぐらぐら揺れているわけじゃない。そんな形で、とても強固な支配体制が整っているの」

真人はそんなことを思い出しながら、コミュニケーションを外から観察した。指揮系統とかいう難しいことは、今のおれには関係ない——。真人は思う。雄詞を奪い返して、とりあ

えず東京に連れて行く。目標は、それだけだ。

学校が休みに入ると、コミュニンにいる小学部と中学部の子どもたちの作業時間は増える。真人はコミュニンの周辺をまわり、雄詞の姿を見つけ、どのような作業に従事させられているか、作業の時間帯はいつかを把握することに専念した。敷地内へ忍び込むのは危険だという点では、大地と真人の意見は一致している。

早朝のことだった。一度、敷地を出てイチゴのビニールハウスに向かう途中の雄詞を含む、十人の児童と出くわした。自転車に乗った真人は正面から、その集団とすれ違った。コーチが一人付いていた。真人はわざとスピードを落とし、雄詞と目を合わせようとした。

一瞬、目と目が合った。だが、痩せこけてふらふらした足どりの雄詞の目は、自転車に乗った若い男が兄であることにまったく気づいた様子ではなかった。とっさに、真人は舌を口蓋にくっつけて真空に近い隙間を作り、その舌を弾いてポンと鳴らしてみた。真人はこの舌打ちがうまい。雄詞が赤ん坊のころから、よく舌を鳴らして、びっくりさせたり、音階をつけて曲を奏でて聞かせたことがある。

ポンと舌を強く鳴らした瞬間に、雄詞の目が大きく開いて、辺りを見回した。もう一度鳴らすと、数メートル離れた所にいる真人の姿に目を向けた。雄詞は口を開けて驚いた表情を見せた。

真人は、幼い雄詞に何度も聞かせたことのある古いドラえものの主題歌を舌で鳴らしながら、自転車のスピードを上げ、そばを駆け抜けた。ほかの児童たちも、突然の旋律に反応し真人を見た。五メートルほど離れたところで、真人は自転車に乗ったまま、振り返った。三、四人の児童が振り向いていた。その中に雄詞はいなかった。

確かに、こっちを見た。この町であの曲を舌で鳴らす者と出会うことなど、まずあり得ることではない。絶対に、おれだと気づいたはずだ——。真人は確信した。おれが、この町にいると知ったにちがいない。振り向かなかったのは、付き添っているコーチに注意されないように、わざと無視していたからだ。

雄詞、お兄ちゃんが、迎えに来たぞ。

真人は、雄詞を奪還する日を決めた。宿泊先のビジネスホテルは毎日変えている。携帯電話で大地に決行の日とだいたい時刻を知らせた。

「分かった。変更があったら、電話しろ」

大地はそう答えた。

以前より、雄詞の身長は伸びていた。だが、いかにも弱々しく見え、頼りなさすぎる——。真人はそんな印象をいだいた。ちゃんとスクーターの後ろでしがみついているだろうか。

盗むスクーター選びに苦労した。雄詞はスクーターの後ろに乗った経験はないはずだ。小型のスクーターがいいだろう。子ども用のヘルメットは買えばいい。小さめの手でも握りやすい、腰に巻くベルトも買うことにした。

スクーターでの逃走のルートを短くし、この町の駅で電車に乗る計画は断念し、タク

シー会社からタクシーに乗り、二駅離れた急行の止まる駅まで行くことにした。コミュニケーションの子どもたちが身に着けている作業用のジャージを着替えさせるために、シャツとジャンパーとパンツを買った。両手が自由に使える動きやすい、デイパックも用意してやった。

＊

前夜。

なかなか寝付けなかった。

頭の中で何度も、シミュレーションしたことがそのまま実行できるとは限らない。分かっているが、いくつかのバリエーションが次々と頭に浮かぶ。そのつど、雄詞の顔を思い出し、それに母親の顔を重ねてしまう。

雄詞は幼いころから母親によく似ていた。瓜二つに見えると感じたことも、頻繁にあった。そんな時には、真人は孤独感を覚えた。二歳の時に別れた実母の顔は完全に忘れている。

コミュニケーションから雄詞を連れ出すことにより、うちの家族は完全に破壊される——。雄詞は母親と一体化している。雄詞を奪うことで、おれはこの家族を壊し、父親と母親に復讐しようとしている。そんな唐突な思いにとらわれ、真人ははっとした。

二カ月ほど前に、大地が倒れ、眠っている無防備な姿を初めて見せた時のことが思い出された。

あの晩も真人はなかなか寝付けなかった。うなされているのか、一時間置きくらいに大地が叫んだ。そのたびに声を掛けたが、大地は目を覚まさなかった。毛布にくるまった大地の隣に添い寝するようにして、真人は横になっていた。

そのまま眠れそうもないと思っているうちに寝入った。

「おかあさん——」

確か、そんな声を聞いて目を覚ました。大地の声にしては、子どものように高い声だった。自分の寝言だったかとも思った。

あのとき、真人はなぜか実母の顔を思い浮かべようとしていた。真人が二歳の時に実母と父親は、既に別居していたという。写真も見せてもらったこともない。それなのに、懸命に実母の顔を思い出そうとしている。

おかあさん——。真人は、実母に届くように声を上げて呼んでみた。何度か呼んでいるうちに、眠気を覚えた。

眠ることは死ぬことに似ている——。不意にそんな言葉が思い出される。あれは、大地が口にした言葉だ。大地の運転するバイクのリアシートにまたがり、大きな屋敷の塀に沿った道路に瘤癩玉をばらまいた、あの夜。

眠るのが怖い、夢を見るのが怖い、眠っている姿は死んだ姿に似ている——。そう思った瞬間を境に、真人は眠りに落ちた。

＊

午前。

目をつけていたアパートの駐車場からスクーターを盗み出した。

折に触れ二日間観察したが、スクーターの持ち主の男性は、昼間は働いていて夜にし
か乗ることがない。スクーターのロックを外してスタートさせ、近くの神社の境内に入
る。神殿の裏に隠してある、雄詞用のヘルメットを取り出し、スクーターにくくりつけ
る。デイパックには、最小限必要な自分の持ち物と、雄詞のために用意したデイパック
と衣類が詰まっている。

スクーターでコミュニケーションに近づく。敷地内から、児童や生徒たちがいくつかのグル
ープに分かれて間を置いて出て行く。児童らしき集団を目で追いながら、一度通り過ぎる。
折り返して、もう一度コミュニケーションに近づく。

雄詞のいる集団が目に入った。行き先は鶏舎らしい。別の道を使って先回りして待つ。
十二人の児童とコーチ一名から成る集団が鶏舎に向かって来る。路肩に止まり、故障し
たスクーターをいじっている振りをした。雄詞が近づいたところで、舌を鳴らした。雄
詞が顔を上げた。

「すみません。この辺にホームセンターとかありませんか？」

集団の後部にいるコーチに声を掛ける。コーチがスクーターに目をやった瞬間に、グ
ラブにしのばせた小型のスパナで相手の後頭部を打つ。コーチがうなって倒れた。驚い
た児童たちは口を開けているだけで、声も上げない。みんな同じようにぼんやりとした
表情をしている。

雄詞を見ると顔面が蒼白になっている。

「後ろに乗れ」と声を掛けたが、雄詞は下を向く。「何をぐずぐずしてるんだ。行こう。住
む場所は用意してあるから大丈夫だ」

「ぼく、行かない。ここのほうがいい」

こいつは夢を見ている。出口のない館で眠らされ、夢を見ている——。『逃げるが逃げ
ないになる』。大地の言葉の意味が分かったような気がした。

雄詞のほおを引っ叩き、否応なしに連れ去ろうと考える。

雄詞が後ずさりする。顔がひきつっている。兄に会った喜びも、逃げようという意思
も感じられない。これではスクーターの後ろに乗せても落ちるだけだろうと思う。

「ぼくを、連れてってよ」

背後から声が出た。振り向くと、ぼっちらりとした体つきの少年が近寄って来る。新
入りらしい。コミュニケーションの子どもたちは、小柄で痩せている。目つきにも力が感じられ
ない。その少年だけが、生きようとする力に満ちた目をしている。

雄詞の姿を探すと、大柄な児童の後ろに身を隠すようにしている。

コーチが起き上がろうとする。スパナで、今度は脳天を打つ。

『逃げるが逃げないになる』

真人は弟を奪還するのをあきらめることにした。たとえ一種のマインドコントロール
の下にあるとしても、雄詞の意思は尊重しなければならない。真人は思う。

用意していたヘルメットを少年にかぶらせ、後部座席に座らせた。

「腰に手を回して、おれのベルトのここを握っている。絶対に離すな」

「うん。大丈夫」

エンジンを掛ける。もう一度雄詞の顔を見たいと思ったが、怒りと嫌悪感が勝つ。そのまま発進する。バックミラーに、立ち上がったコーチが携帯電話を耳に当てている姿が映った。

「絶対に、手を離すなよ。スピードを上げるからな」

後ろにびったり体を押し付けている少年に聞こえるように怒鳴る。

「うん。分かった」

元気な声が返ってくる。

自分の目が潤んでいるのを感じる。まばたきをして、涙を追い払い、県道を進む。進みながら、中川大地の運転するバイクのリアシートに乗り、見知らぬ場所を縫うようにして走り回った夜のことを思い出す。シートにいる自分と後ろでしがみついている少年が、あの夜の大地と自分とに重なる。

前に行く軽トラックを追い抜きながら、涙を追い払うために一瞬目を思い切り閉じたあと、前方をにらんだ。

二日前に町ですれ違った長瀬友美の顔が頭に浮かんだ。相変わらず猫背の姿勢で歩いていた。この町にいない間に友美よりも背が高くなっていたことを、真人は知った。

(完)

参考文献 : 『カルトの子 心を盗まれた家族』 米本和広著・文藝春秋刊

【小説】奪還

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
